

桜井市埋蔵文化財
発掘調査報告書 第47集

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書 4

————— 第14次・44次・58次・78次・99次・101次・103次調査 —————

2018. 3. 30

桜井市纏向学研究センター編
桜井市教育委員会

序

私達の桜井市は大和盆地東南部に位置し、山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、纏向川等の清流を集めた大和川が市域を横断し、大和川両岸には南には茶臼山古墳やメスリ山古墳、安倍寺跡、上之宮遺跡、山田寺跡、大福遺跡、北には箸墓古墳、纏向遺跡、芝遺跡といった全国的にも著名で貴重な文化遺産が数多く遺されています。

桜井市ではこれらの遺跡の保護・啓発事業の一つとして市内遺跡の調査保存に力をいれておりますが、本書に報告いたしますのは過去に国の補助を受けて実施した纏向遺跡の調査報告であります。

現地調査にあたりましてご指導・助言を賜った多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、厳寒、酷暑のなか発掘・整理作業に従事していただいた作業員、整理員、学生諸君の方々に深く御礼申し上げます。

この多くの方々に支えられて成った本書が文化財の普及・啓発の一助となり、地域の歴史に光をあてることとなれば当委員会としても望外の喜びであります。

平成30年3月30日

桜井市教育委員会

教育長 上 田 陽 一

例 言

1. 本書は国、県よりの補助を受けて実施した纏向遺跡の遺跡範囲確認調査の報告書である。
2. 本書の作成にあたっては平成27～29年度の国・県による補助事業の採択を受けており、桜井市纏向学研究センターにおいて調査資料の再整理と報告書の作成を行なったものである。
3. 調査期間と桜井市の体制は以下のとおりである。所属はいずれも調査当時のものである。
纏向遺跡の調査の中でも比較的初期のものもあり、記録を完全に確認できなかった部分もある。
遺漏もあると思われるがご容赦願いたい。なお、所属は調査当時のものである。

【昭和52年度 纏向遺跡第14次調査】

調 査 機 関：奈良県立橿原考古学研究所・桜井市教育委員会 桜井市教育委員会 教育長 西村司、
教育次長 梅咲善之助、社会教育課長 吉川益弘、社会教育係長 渡辺実恵、社会教育
係技師 萩原儀征、主事 森口治

【昭和60年度 纏向遺跡第44次調査】

調 査 機 関：桜井市教育委員会 教育長 外嶋尚春、教育次長 近藤貞次、社会教育課長 内藤新治、
文化財係長 萩原儀征、技師 清水眞一、主事 上田寿一

【平成元年度 纏向遺跡第58次調査】

調 査 機 関：桜井市教育委員会 教育長 南正直、教育次長 坂本昌弘、社会教育課長 小山剛、文化
財係長 萩原儀征、主任 清水眞一

【平成6年度 纏向遺跡第78次調査】

調 査 機 関：桜井市教育委員会 教育長 南正直、事務局長 沢井和彦、社会教育課長 高松隆司、社
会教育課主幹 萩原儀征、文化財係長 清水眞一、文化財係主査 奥田和子

【平成9年度 纏向遺跡第99次、第101次、第103次調査】

調 査 機 関：桜井市教育委員会 教育長 南正直、事務局長 浅田安夫、事務局事長兼社会教育課長
栢木充弘、社会教育課主幹 萩原儀征、同主幹 下谷恵三、文化財係長 清水眞一、文
化財係主査 杉野清美、同技師 橋本輝彦、同嘱託 岩崎大介

【平成27年度】

桜井市教育委員会 教育委員会 石田泰敏、事務局長 竹田勝彦、桜井市纏向学研究センター所長
寺沢薫、文化財課長 渡辺芳久、文化財課主幹・調査研究係長事務取扱 橋本輝彦、文化財係長
丸尾亘、主査 松宮昌樹、主任 福辻淳、丹羽恵二、技師 森暢郎、臨時職員 木場佳子、三沢朋未、
飯塚健太、生島雅美

【平成28年度】

桜井市教育委員会 教育長 石田泰敏、事務局長 竹田勝彦、桜井市纏向学研究センター所長
寺沢薫、文化財課長 渡辺芳久、文化財課主幹・調査研究係長事務取扱 橋本輝彦、文化財課副主

幹・文化財係長事務取扱 丸尾亘、主査 松宮昌樹、福辻淳、主任 丹羽恵二、技師 森暢郎、技師補
飯塚健太、臨時職員 木場佳子、三沢朋未、生島雅美、藤村裕美

【平成29年度】

桜井市教育委員会 教育長 上田陽一、事務局長 奥田道明、桜井市纏向学研究センター所長
寺沢薫、文化財課長 橋本輝彦、文化財課主幹・文化財係長事務取扱 丸尾亘、調査研究係長
福辻淳、主査 松宮昌樹、丹羽恵二、主任 森暢郎、技師 飯塚健太、臨時職員 三沢朋未、生島雅美、
藤村裕美、中屋菜緒

4. 各調査時の調査補助員・整理作業員のほか、再整理にあたっては次の人々が従事した。
調査補助員：岩永祐貴（奈良大学大学院学生） 米田拓海（奈良大学学生）
整理作業員：植田白矢、大内久美子、大西里佳、北平太恵子、富永雄介、西田千秋、山口充子
5. 本書所収の写真は、遺構写真は調査担当者が、遺物写真は森が行なっている。
6. 本書で用いた方位のうち、第44次、第58次は磁北を示し、第78次、第103次は世界測地系による座標・座標北を示す。レベル高は海拔高を示す。他の次数は任意の地区設定によるものである。
7. 本書の執筆は森がおこなった。また、金原氏より玉稿を賜った。本書における遺物実測図は断面表現を土師質-白、須恵質-黒、瓦質-アミカケとした。
8. 本書掲載の遺物出土重量は、土器への補修材充填後に計測している。
9. 本書掲載の土器の分類には、以下の文献を参考にした。
寺沢薫1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
西弘海1986『土器様式の成立とその背景』西弘海遺稿集刊行会編 真陽社
10. 本報告所載の遺物と写真、図面は桜井市教育委員会において保管している。活用されたい。

目 次

序
例言
目次

第1章 位置と環境

第1節 桜井市の位置と環境	1
第2節 纏向遺跡の位置と環境	2

第2章 発掘調査の成果

第1節 纏向遺跡第14次調査	5
第2節 纏向遺跡第44次調査	13
第3節 纏向遺跡第58次調査	21
第4節 纏向遺跡第78次調査	23
第5節 纏向遺跡第99次調査	33
第6節 纏向遺跡第101次調査	41
第7節 纏向遺跡第103次調査	45
付載 纏向遺跡第78次調査溝1における花粉分析の概要	48

挿 図 目 次

図1 桜井市の位置	1
図2 纏向遺跡の古地理図(安井2006)	2
図3 纏向遺跡の位置と調査地の所在(1/20000)	4
図4 纏向遺跡第14次調査地の位置(1/2000)	5
図5 纏向遺跡第14次調査出土遺物1(1/3)	8
図6 纏向遺跡第14次調査出土遺物2(1/3)	9
図7 纏向遺跡第14次調査出土遺物3(1/3)	10
図8 纏向遺跡第44次調査地の位置(1/3000)	13
図9 纏向遺跡第44次調査平面図(1/100)	15
図10 纏向遺跡第44次調査東壁断面図(1/50)	16
図11 纏向遺跡第44次調査西壁断面図(1/50)	16
図12 想定される方形周溝墓(1/400)(橋本2006)	17
図13 纏向遺跡第44次調査溝A出土遺物1(1/3)	18
図14 纏向遺跡第44次調査溝A出土遺物2(1/3)	19
図15 纏向遺跡第58次調査地の位置(1/2000)	21
図16 纏向遺跡第58次調査平面・断面図(1/80)	22
図17 纏向遺跡第78次調査地の位置(1/1500)	23
図18 纏向遺跡第78次調査出土遺物(1/3)	25
図19 纏向遺跡第78次調査遺構全体図(1/150)	26
図20 調査区南半平面(1/80)・断面図(1/40)	27
図21 調査区北半平面(1/80)・断面図(1/40)	28
図22 調査区西半南壁(1/40)	29
図23 調査区西半西壁(1/40)	29
図24 溝1西壁断面図(1/20)	29

図25	纏向遺跡第99次調査地の位置 (1/3000).....	33
図26	纏向遺跡第99次調査平面・断面図 (1/100)	35
図27	纏向遺跡第99次調査出土遺物 1 (1/3).....	36
図28	纏向遺跡第99次調査出土遺物 2 (1/3).....	37
図29	纏向遺跡第99次調査出土遺物 3 (1/3).....	38
図30	纏向遺跡第101次調査地の位置 (1/3000)	41
図31	纏向遺跡第101次調査平面・断面図 (1/40)	43
図32	纏向遺跡第101次調査出土遺物 (1/1)	44
図33	纏向遺跡第103次調査地の位置 (1/1500)	45
図34	調査区配置図 (1/200)	46
図35	纏向遺跡第103次調査平面・断面図 (1/80)	47

表 目 次

表 1	本書で報告する調査.....	3
表 2	遺物観察表.....	11
表 3	遺物観察表.....	19
表 4	遺物観察表.....	25
表 5	土層対応表.....	30
表 6	遺物観察表.....	39
表 7	纏向遺跡第78次調査花粉分析結果.....	50

図 版 目 次

図版 1	纏向遺跡第14次調査 1
図版 2	纏向遺跡第14次調査 2
図版 3	纏向遺跡第14次調査 3
図版 4	纏向遺跡第44次調査 1
図版 5	纏向遺跡第44次調査 2
図版 6	纏向遺跡第44次調査 3
図版 7	纏向遺跡第58次調査 1
図版 8	纏向遺跡第78次調査 1
図版 9	纏向遺跡第78次調査 2
図版10	纏向遺跡第99次調査 1
図版11	纏向遺跡第99次調査 2
図版12	纏向遺跡第99次調査 3
図版13	纏向遺跡第101次調査 1
図版14	纏向遺跡第103次調査 1

第1章 位置と環境

第1節 桜井市の位置と環境

桜井市は、奈良盆地の東南部に位置する人口約6万人、面積98.93km²の都市である。鉄道や国道によって大阪など大都市と結ばれて近郊都市としての様相をみせる一方で、文化財が豊富にある観光都市としての側面もあわせ持つ。市域の北西部は奈良盆地の一部を構成しているが、北東部や南部は竜門山塊や大和高原に連なる山々があり、それらの山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、纏向川等の清流を集めた大和川が市域を横断している。市域の北は天理市・奈良市、東は宇陀市、西は橿原市、田原本町、南は明日香村、吉野町と接しており、奈良盆地と山間部の宇陀地域、吉野地域との結節点である。また、現在においても東海地方と近畿地方を結ぶ近鉄大阪線や、北和と中和を結ぶJR桜井線が走る交通の要衝であるが、過去においては大和川を通じての水運も重要で、飛鳥地域の外港として機能していた時期もあった。

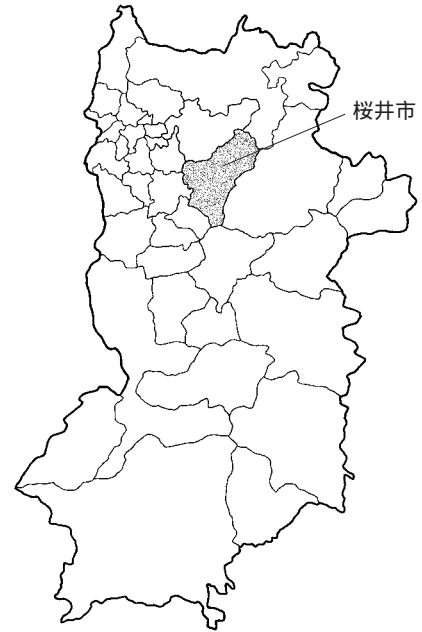


図1 桜井市の位置

本市には旧石器時代の遺跡は少なく、芝遺跡や吉備池遺跡などで石器が見つかった程度である。縄文時代に入ると遺跡は増加する。特に後期から晩期の資料は多く、後期は東新堂遺跡や上之庄遺跡、吉備遺跡などで遺構が検出されており、晩期には纏向遺跡や粟殿遺跡などで遺物が出土している。弥生時代では銅鐸や木甲、鞆羽口が出土し、大規模な環濠を多重に巡らした集落である大福遺跡や、絵画土器が出土した芝遺跡が平野部に立地する。市中南部の丘陵地では安倍山遺跡で弥生時代後期の環濠がめぐり、高地性集落の存在を示している。古墳時代では本書で詳述する纏向遺跡で集落域が展開し、箸墓古墳、纏向石塚古墳をはじめ前方後円墳が築造されるほか、市南部には茶臼山古墳・メスリ山古墳の2基の大型前方後円墳が所在する。集落では脇本遺跡で竪穴住居や銅鐸片を検出している。中期には大規模な古墳こそないものの、泊瀬朝倉宮の候補にも上げられる脇本遺跡や、市中南部の丘陵上に風呂坊古墳群や谷遺跡といった渡来人の痕跡を残す遺跡が展開する。後期から終末期にかけては赤坂天王山1号墳や文殊院西古墳、段ノ塚古墳、舞谷1号墳などが存在し、古代寺院では吉備池廃寺跡、山田寺跡、安倍寺跡などが認められる。これらはいずれも大王家や有力氏族と密接に関連する遺跡で、桜井市周辺が古代国家の形成・成長に重要な役割を果たした証左といえる。橿原市との市境周辺は大藤原京域に含まれ、条坊の痕跡が残る。藤原京廃絶後は青木廃寺、粟原寺跡、慈恩寺跡、長谷寺といった寺院が多く存在するものの、比較的集落関連の遺構は少ない。本書で報告する纏向遺跡第14次調査では古代の遺物が多くを占めており、比較的希少な例となろう。

第2節 纏向遺跡の位置と環境

纏向遺跡は桜井市域北西部の平野部に位置する古墳時代初頭から前期の大規模な遺跡である。遺跡の範囲には諸説あるが、おおよそ東西2km、南北1.5kmをはかる。奈良盆地の東側縁辺部にあたるため、遺跡東側に広がる大和高原より流れ出る纏向川や烏田川が形成する東高西低の扇状地上に遺跡が展開する。扇状地は段丘化しており、纏向遺跡は下位段丘堆積物や縄文時代後期の洪水堆積物上に成立していることが明らかとなっている。標高は大和川の氾濫原に近い西側では60m前後、東側の山間部に近いところでは120m前後をはかる。

細かく地形を検討すると、扇状地には旧流路やその後裔である現用水路が走る谷部分と、旧流路に削り残されるように尾根状に伸びる微高地部分が認められる。多くの遺構は微高地上に展開する。微高地は北から草川微高地、巻野内微高地、太田北微高地、太田微高地、箸中微高地と名付けられている。また旧河道についても纏向川については纏向川河道1（辻河道）、纏向川河道2、纏向川河道3、纏向川河道4の名称が付けられている¹⁾。

庄内式期以前の遺構は太田北微高地に多く、第4次調査で検出した纏向大溝や、纏向石塚古墳、近年庄内式期としては日本列島最大級の建物を含む建物群を検出した辻地区はここに立地する。

布留0式期に下ると各微高地に多くの遺構が展開するが、比較的標高の高い巻野内微高地では、第80次調査でV字溝と柱列が検出されたほか、第50・90次調査では布留0式期新相から布留1式期古相にかかる導水施設、第65次調査で検出した巾着状絹製品など、特殊な遺構・遺物が検出されている。

布留2式期には一辺50mを超す「コ」字形区画溝を辻地区で検出している。また、箸中微高地では

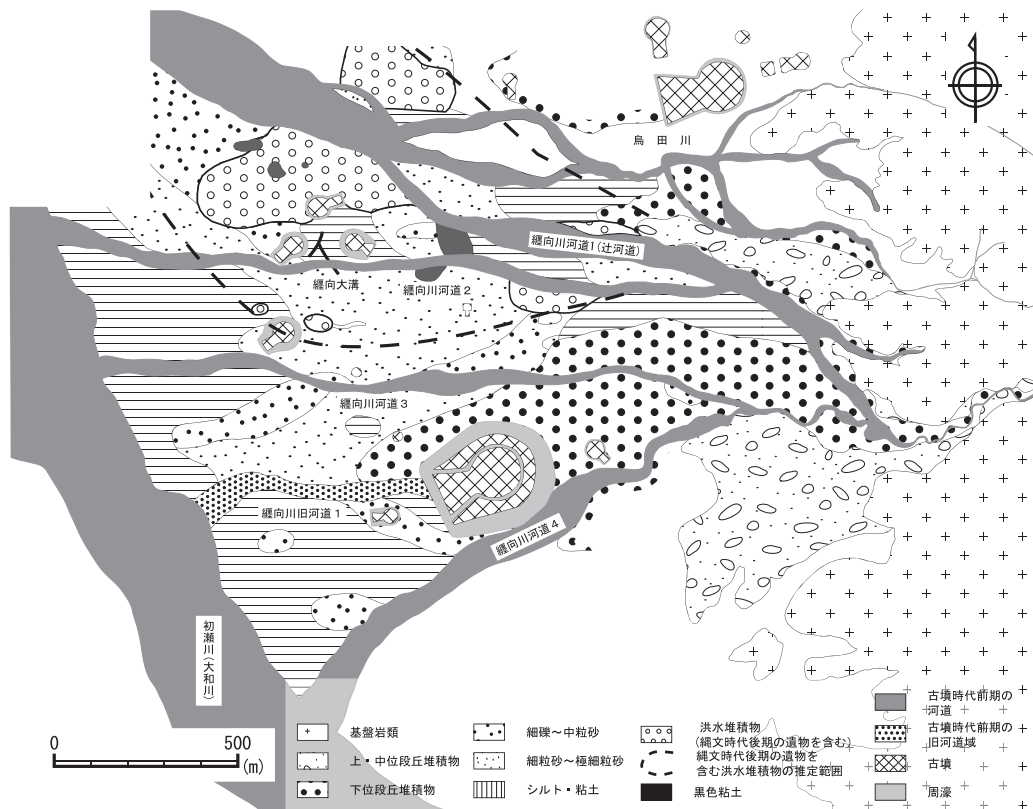


図2 纏向遺跡の古地理図 (安井2006)

古墳時代前期末に箸中イヅカ古墳やビハクビ古墳が存在する。また近年二反田古墳が古墳時代前期中頃の古墳であることが明らかとなり、布留0式期以降衰退するとされる纏向遺跡の具体的な姿が明らかとなりつつある。古墳時代中期前半の遺構は少ないが、中期末以降になると小規模な円墳や方墳、帆立貝型前方後円墳が築造され始める。これまで調査されたものとしては、平塚古墳、堂ノ後古墳といった古墳が挙げられる。また纏向遺跡でも高所に位置する珠城山丘陵上には前方後円墳である珠城山1～3号墳が築造される。このほか削平された古墳も多く、石塚東古墳や勝山東古墳、ヤナイタ古墳群などが検出されている。

古代の遺構としては第142次調査で上ツ道跡を検出しており、纏向遺跡内部に上ツ道が縦断していたことが推察できるほか、第72次調査では「宮内」墨書土器、第189次調査で奈良三彩が出土しており、付近に何らかの一般農村とは異なる施設が展開していた可能性がある。

文献上では、「まきむく」地名は古事記、日本書紀に見え全て大王宮の所在を示すものである。後世の記録となるが『帝王編年記』にも宮の所在地が記されている。このほか、『新撰姓氏録』や、『続日本後紀』にも宮に関わる記事がみえ、この頃まで宮にかかわる伝承が存在していたものと考えられる。また万葉集にも「まきむく」を詠んだ和歌があり、8世紀前半には地名として用いられていたことが判明する。その後はあまり用いられなくなり、「巻向山」の用例が増加する。平安時代後半から鎌倉時代には和歌集に多く「まきむく」が載せられるがその多くは山や柚に関連するものであり、こちら「巻向山」との関連が想起されるものである。その後中世には『大乘院寺社雑事記』にマメコシや辻といった地名や人名が登場する。室町時代の『出雲荘土帳』には纏向遺跡の過半を覆う地域の絵図があり、中世の纏向地域が克明に記載されている。

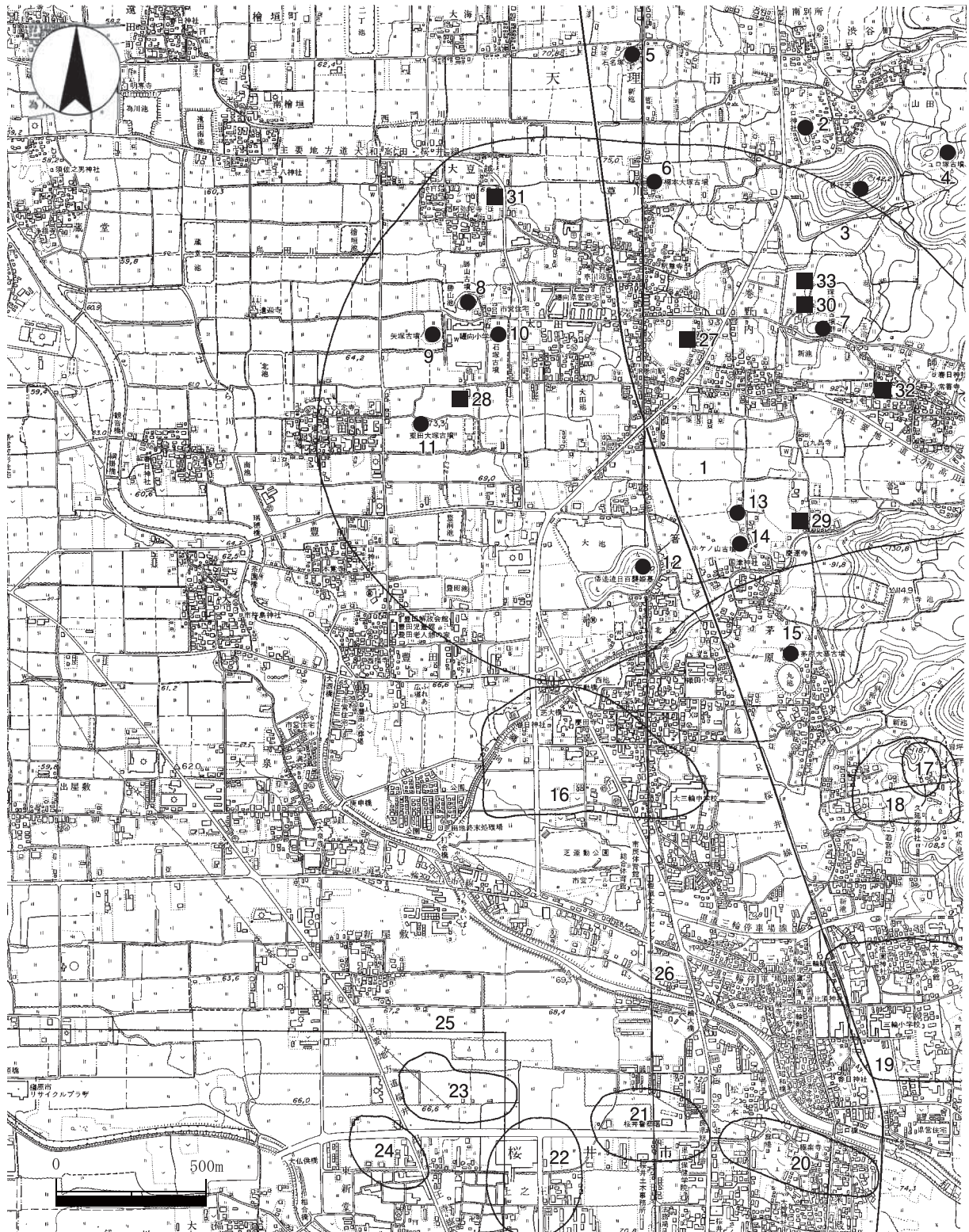
なお本書では、この纏向遺跡で実施された発掘調査のうち、第14次調査、第44次調査、第58次調査、第78次調査、第99次調査、第101次調査、第103次調査について報告するものである。このうち第14次調査については『奈良県遺跡調査概報一九七七年度』に概報が掲載されている。また第99次調査、第101次調査、第103次調査は『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集 桜井市平成9年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書』に概要が掲載されている。

【注記】

- 1) 安井隆浩2006「奈良県纏向遺跡の立地基盤と古地形環境」『東田大塚古墳 奈良盆地東南部における纏向型前方後円墳の調査』(財)桜井市文化財協会

表1 本書で報告する調査

地図No.	調査名称	所在地	期間	面積(m ²)	主な遺構	担当者
27	纏向遺跡第14次	巻野内字殿西376-2、376-3	1977/7/15～8/6	60	旧流路	萩原・石野
28	纏向遺跡第44次	東田字ヤナイタ178	1985/6/15～7/27	100	方形周溝墓	萩原
29	纏向遺跡第58次	箸中字河原531-1、4、5	1989/10/23～11/16	54	なし	萩原
30	纏向遺跡第78次	巻野内字玉井466、467	1994/3/7～3/31	130	区画溝	萩原
31	纏向遺跡第99次	大豆越字灯籠田107-1	1997/8/5～8/22	75	旧流路	岩崎
32	纏向遺跡第101次	穴師322	1997/11/25～12/5	12	旧流路	岩崎
33	纏向遺跡第103次	巻野内字尾崎花485	1997/12/9～1/16	48	溝	岩崎



- | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-------------|----------|
| 1 纏向遺跡 | 7 珠城山古墳群 | 13 北口塚古墳 | 19 三輪遺跡 | 25 大藤原京関連遺跡 | 31 第99次 |
| 2 上の山古墳 | 8 勝山古墳 | 14 ホケノ山古墳 | 20 三輪松之本東遺跡 | 26 上ツ道 | 32 第101次 |
| 3 渋谷向山古墳 | 9 矢塚古墳 | 15 茅原大墓古墳 | 21 三輪松之本遺跡 | 27 第14次 | 33 第103次 |
| 4 シウロウ塚古墳 | 10 纏向石塚古墳 | 16 芝遺跡 | 22 上之庄遺跡 | 28 第44次 | |
| 5 石名塚古墳 | 11 東田大塚古墳 | 17 箕倉山城跡 | 23 上之庄遺跡 | 29 第58次 | |
| 6 柳本大塚古墳 | 12 箸墓古墳 | 18 箕倉山遺跡 | 24 東新堂遺跡 | 30 第78次 | |

図3 纏向遺跡の位置と調査地の所在 (1/20,000)

第2章 発掘調査の成果

第1節 纏向遺跡第14次調査

1. はじめに

纏向遺跡第14次調査は大字巻野内376番2、3（字殿西）で行った。この周辺は比較的既往の調査が少ないが、北西約20m地点で第189次調査が行われている。また、「宮内」と書かれた墨書土器が出土した第72次調査¹⁾が北西約280m地点で行われている。なお第14次調査は概要が報告されており²⁾その性格は旧河道とされる。調査は昭和52年7月15日から8月6日にかけて行なった。

2. 調査の状況

本調査は図面が残されておらず、正確な調査位置も不明である。そのため写真と概要報告書、遺物に付されたラベル等から層位を復元せざるを得ない。概報によると調査区は東西約14m、南北約4mを基本とし、必要に応じて拡張している。調査面積は144㎡とするが、これは地番全体の面積と思われ実際には約60㎡前後と考えられる。また、既往の報告³⁾では調査区は調査地南側に設定されたものとみて配置しているが、写真を見ると調査地北辺の畔に沿って東西トレンチを設定したものと考えられる。耕作土上面から約1.2mで砂礫層に達し、表土下約2.3mまで掘り下げたが砂礫層が続き、湧水のために掘削を断念している。

層位についてはやや長くなるが概要報告書を引用すると「上層から耕作土、黄灰色土、濃黄色土、黒褐色土、淡黒褐色土、灰黒色砂礫層、灰黒色細礫混砂層、灰褐色土、灰黒色砂礫層、灰黒色細礫混砂層（ママ：編者注）、灰褐色砂礫層、褐色砂混礫層の層序である。各層の状態と含まれている遺物は次のとおりである。

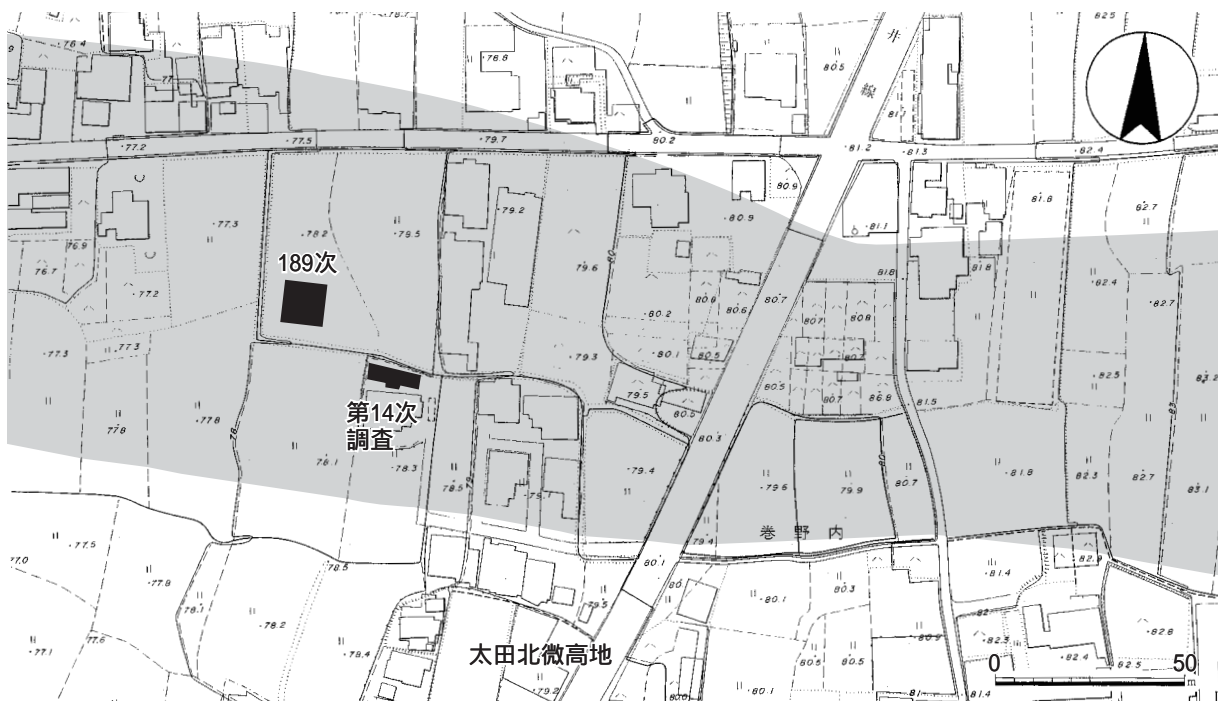


図4 纏向遺跡第14次調査地の位置（1/2000）

褐色砂混礫層及び灰褐色砂礫層は無遺物層であり以下礫層は続く。

灰黒色細礫混砂層は、小面（ママ：編者注）から砂へ変化する途中の粒子の荒い砂層がうすい砂層と交互層をなしている。灰黒色砂礫層は灰黒色細礫混砂層に小石が混入し、うすい砂層と交互層をなしている。

灰黒色砂礫層は、灰黒色細礫混砂層に小石が混入しうすい砂層と交互層をなしている。（ママ：編者注）これら2層に含まれる遺物は、須恵器、土師質土器片、板、杭、自然木片、種子、獣骨片等である。須恵器には、口縁部径8.5cm、高4.7cm、外面ナデ調整後胴部中央に櫛描き波状文を施したのち把手を付けた把手付壺、甕、横瓶等を包含する。

淡黒褐色土層は黒褐色土層より砂の含有量が多く又黒い。この層に含まれる遺物は、須恵質高台付杵（ママ：編者注）、土師質容器片、黒色土器等、容器以外では土師質の土馬、瓦、埴等がある。

土馬は両耳及び肩部以下が剥落している。その表現は写実的で、目、鼻口は竹管を押しあてることにより表現し、轡、面繫は篋画によって表わし、たてがみは高く、生際から先端にかけてうすくし、首からたてがみにかけて横に三列、これに直交するように縦に残存部では二列竹管紋を施している。

瓦は軒丸瓦と丸瓦の破片を採集している。軒丸瓦は複弁の蓮華文である。

黒褐色土層は、瓦器等を包含している。なお同層内に人頭大の礫が調査区ほぼ中央部、南北方向に幅約1.5mにわたり認められたが、その周辺にも、同形の礫が点在している。

濃黄色土層及び黄灰色土は磁器片をふくみ水田の床土的なものである。

以上これらのことから、古墳時代後期の河道が奈良時代には埋まったものと考えられる」とする。

土層の所見や写真からみても、調査区全域が流路内の堆積土とみてよいと考えられる。なお、第189次調査でも上層に平安時代の堆積層があり、その下層に古墳時代後期以前の層が堆積している。よって、概ね第14次調査と第189次調査は類似した堆積であるものと考えられよう。

3. 遺物（図5～7）

遺物は全体で54680g出土している。須恵器29770g、土師器20430g、瓦2480gをはかる。図化できないが、須恵器甕の体部片が須恵器の過半を占める。ここでは、層位ごとに出土遺物を検討する。ただしかならずしも概報に示された層位と取り上げ段階の層位は一致していないため、層序が不明な土層から取り上げられた遺物も多い。おおそよ黒褐色土層はそのまま対応し、概報の灰黒色砂礫層が遺物取上げの砂層と、淡黒褐色土層が砂礫層と対応すると考える。

黒褐色土層では1～3の黒色土器埴A類が出土しているほか、5～7の土師器皿や10の獣脚、45の複弁蓮華文軒丸瓦などが出土している。2・3には輪花文が描かれる。10は硯の蓋然性が高いが、軟質・白色で硯に適した焼成とは考えにくく、香炉等ほかの器種の可能性も否定できない。45は平城宮式軒丸瓦6225Aである。1点のみ出土した。割れ方から見て積み上げ一本造り技法で製作されている蓋然性が高い。⁴⁾ この層の堆積時期については黒色土器や土師器皿の年代から9世紀後半～10世紀前半とみられる。遺物に付されたカードから下層堆積とみられる砂礫層の上部には灰黒色粘質土や暗灰色

粘質土が堆積している。灰黒色粘質土や暗灰色粘質土には13のような8世紀後半以降に下る個体もみられる一方で、灰黒色粘質土や暗灰色粘質土出土だが砂礫層上面として取り上げられた個体には23の須恵器埴瓶や24の壺H、22の土師器壺Aなどがあり、概して8世紀前半の遺物が中心となる。23には把手の痕跡が残る。27は概報にも示された土馬である。排土採集資料の17に比べると古い時期の所産であり、継続的な土馬を用いる行為があったことをうかがわせる。

続いて砂層、砂礫層の遺物を検討すると、新しいものでは36、37の須恵器坏Bのように7世紀後葉～8世紀前半とみられる遺物があるが、43の体部2段構成の放射状暗文をもつ土師器皿Aは7世紀中葉、41の坏Cは7世紀前半に遡る。40は2方透かしの須恵器高坏で、6世紀末から7世紀前半の所産であろう。44は平瓦で、他に複数の平瓦が出土している。判明するものは全て一枚づくりとみられ、桶巻きづくりとわかる個体はない。いずれも奈良時代の瓦とみられる。遺物で最も古いものは砂層出土の32の須恵器把手付埴で、5世紀中ごろに位置づけられる。ただし砂層からは古代の遺物も出土しており、砂礫層との上下関係は不明である。このほか砂礫層からは馬歯や軽石も出土している。

また、層位が不明であるが12の鞆羽口や16の京都産緑釉陶器も出土している。こうした出土遺物は隣接する纏向遺跡第189次調査の成果とも類似する。このほか層位不明ながら写真には木製品も映り込んでいる。現品は確認できなかった。また、概報中に言及されている埴については同定できなかった。

4. まとめ

以上の遺物と遺構の所見から、纏向遺跡第14次調査は全面が流路内部と考えられ、その埋没時期は5世紀以降、最終的には平安時代に埋没するものと考えられる。この流路は地形から見て纏向遺跡第189次調査や第72次調査地で検出した流路と一体になる蓋然性が高いと考えられる。

出土した軒丸瓦は平城宮で用いられるものと同範である。⁵⁾ 他にも平瓦が複数出土することから見て奈良時代には付近に瓦を用いる建物があったとみられる。1点のみだが非常に重要な知見である。

【注記】

- 1) 森暢郎2015「纏向遺跡第72次調査」『纏向遺跡発掘調査報告書3-第35次・63次・72次調査』桜井市教育委員会
- 2) 萩原儀征1978「桜井市纏向遺跡発掘調査概報 卷之内378番地地点」『奈良県遺跡調査概報1977年度』橿原考古学研究所
- 3) 石野博信編2011『大和・纏向遺跡』学生社第3版 附載 纏向遺跡調査区配置図
- 4) 軒丸瓦について大脇潔氏、今井晃樹氏にご教示を賜った。箇の確認にあたっては奈良文化財研究所所蔵資料を実見させていただいた。記して感謝いたします。
- 5) 石田由紀子2017「平城宮の6225・6663型式軒瓦」『古代瓦研究Ⅶ』奈良文化財研究所

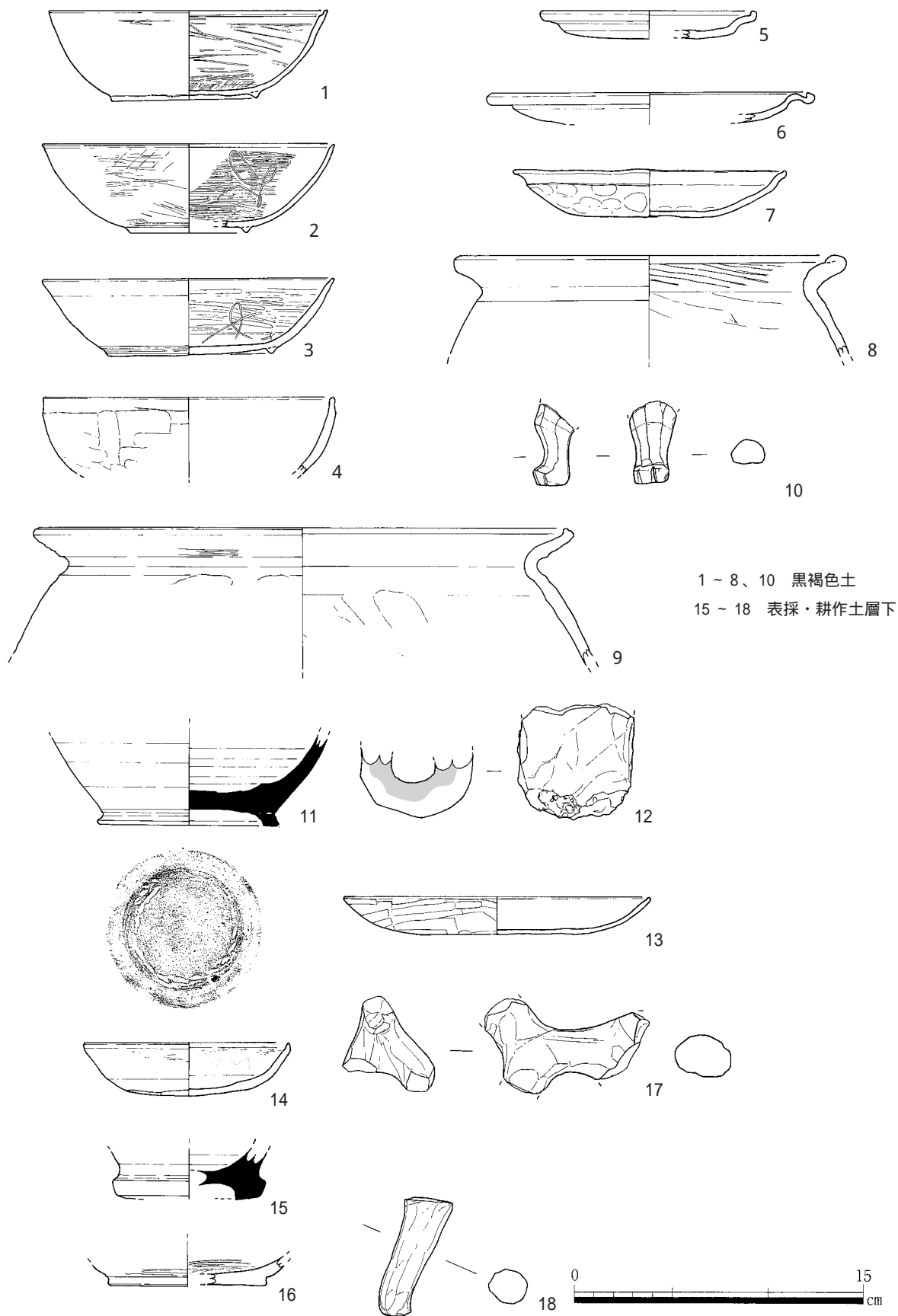
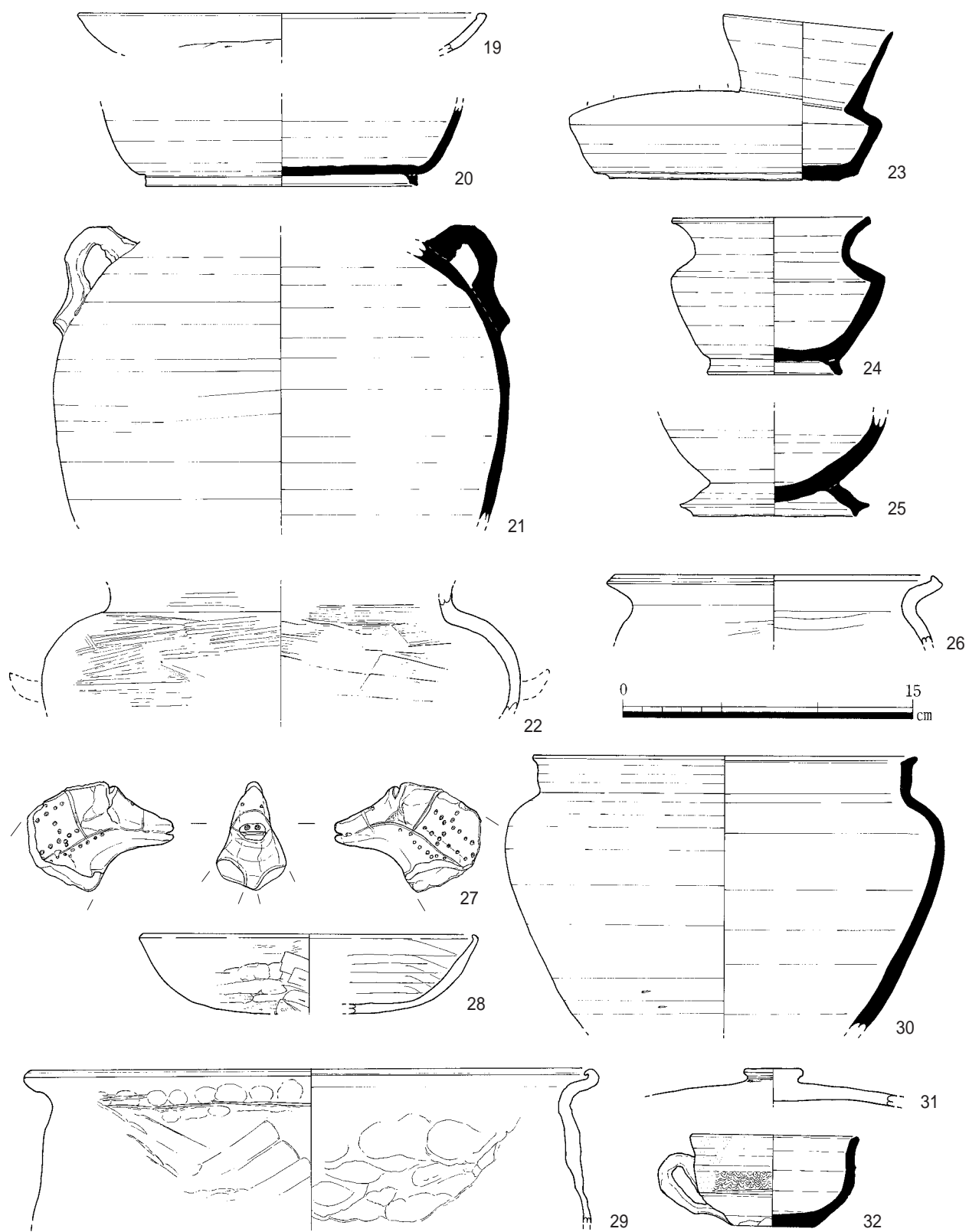


図5 纏向遺跡第14次調査 出土遺物1 (1/3)



19 ~ 27 砂礫層 上面 28、29、31 砂層
32 礫層

図6 纏向遺跡第14次調査 出土遺物2 (1/3)

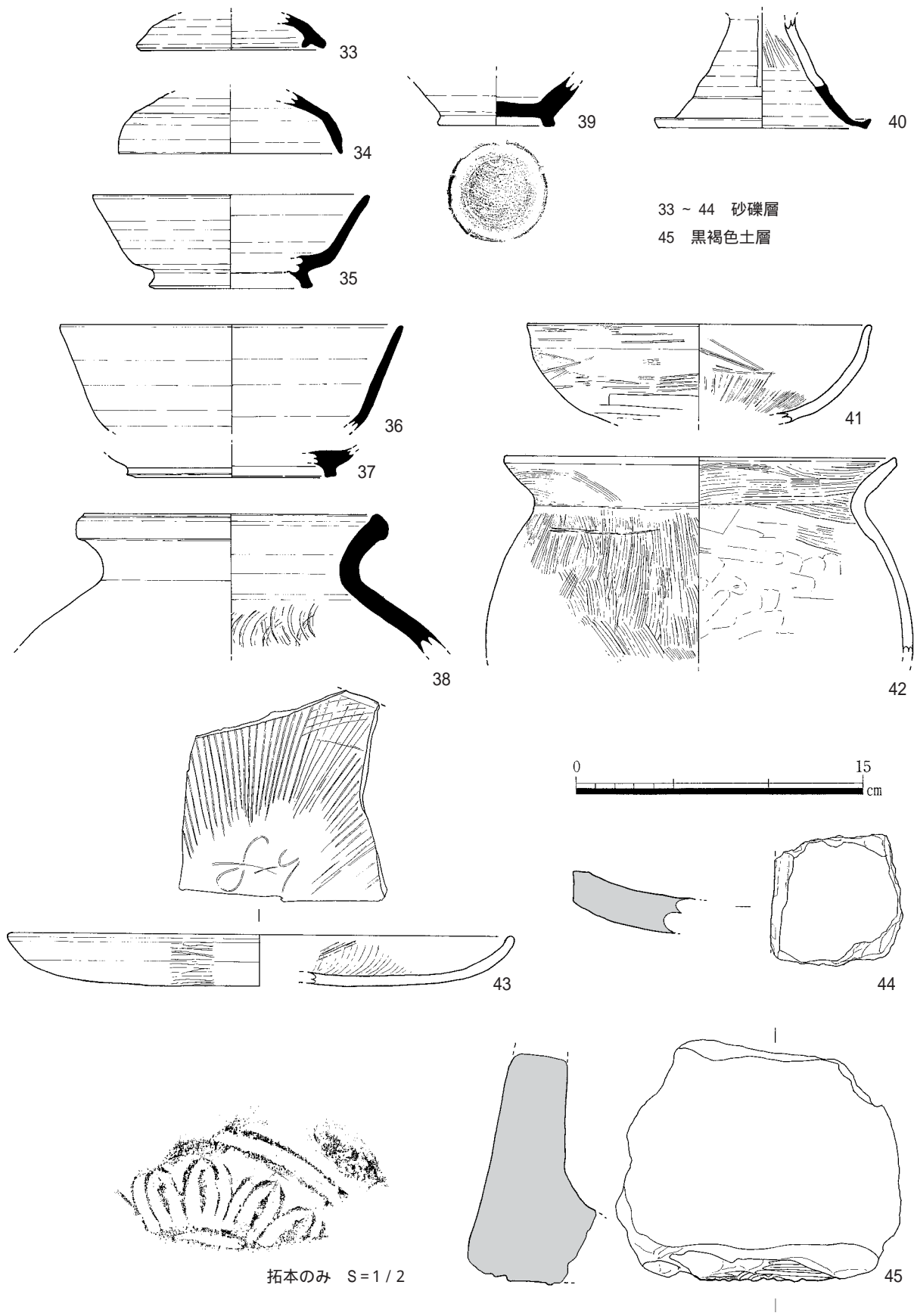


図7 纏向遺跡第14次調査 出土遺物3 (1/3)

表2 遺物観察表

報告No.	地区層位	器種	法量(復元)cm	調整	色調	備考
1	黒褐色土	黒色土器A類壺	口径14.55 器高4.7	外面 マメツ 内面 ミガキ	口縁外面N2/黒 外面10YR7/4にぶい黄橙-5YR6/6橙 内面N3/暗灰	
2	黒褐色土	黒色土器A類壺	口径15.2 器高4.7	外面 ケズリ→横ミガキ 内面 ミガキ・輪花文	外面2.5YR6/8橙(うすい) 内面N3/暗灰	外面も黒色化
3	黒褐色土	黒色土器A類壺	口径15.2 器高3.9	外面 ナデ 内面 ミガキ・輪花文	外面7.5YR8/4浅黄橙-7.5YR7/4にぶい橙 内面N3/暗灰-N2/黒	
4	黒褐色土	土師器壺	口径15.0	外面 口縁部ナデ 体部ユビオサエ 内面 マメツ	外面10YR7/2にぶい黄橙 内面10YR7/2にぶい黄橙-2.5YR6/8橙	
5	黒褐色土層	土師器皿	口径11.0	外面 体部ナデ 底部板ナデ 内面 ナデ	外面10YR8/2灰白 内面7.5YR8/2灰白	「て」の字状口縁
6	砂層 黒褐色土層	土師器皿	口径16.0	外面 ナデ 内面 ナデ	外面7.5YR7/3にぶい橙 内面7.5YR8/4浅黄橙	「て」の字状口縁
7	黒褐色土	土師器皿	口径14.2 器高2.6	外面 口縁部ナデ 体部ユビオサエ 内面 ナデ	外面5YR6/2灰褐 内面5YR6/6橙	
8	黒褐色土層	土師器甕	口径19.8	外面 ナデ 内面 口縁部ハケ体部 板ナデ	外面5YR7/4にぶい橙 内面10YR8/2灰白	
9	暗褐色土	土師器甕	口径27.6	外面 ナデ 内面 ナデ	口縁外面10YR8/3浅黄橙 外面10YR7/1灰白-5/1褐灰 内面10YR8/2灰白-7/1灰白	
10	黒褐色土	獣脚硯?	器高4.3	メントリ	外面7.5YR8/2灰白	軟質で、白っぽい ことから硯ではなく 緑釉香炉等の可能性もある
11	暗褐色粘質土層	須恵器壺	底径9.4 器高4.8	外面 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	外面N6/灰内面N7/灰白	爪形圧痕 ロクロ右回転
12	粘土層	輪羽口	径5.8	内外面ナデ	外面10YR6/2灰黄褐 10YR8/6黄橙 断面10YR5/2灰黄褐 2.5YR5/6明赤褐	先端に気泡が認められる
13	灰黒土層東	土師器皿A	口径16 器高1.95	外面 口縁部までケズリ 内面 ナデ	外面2.5YR6/8橙-2.5YR5/8明赤褐 内面2.5YR5/8橙-10YR6/2灰黄褐	
14	南排水溝 炭黒色土層	燈明皿	口径10.6 器高2.8	外面 体部ナデ 底部ユビオサエ 内面 ナデ	外面7.5YR8/1灰白 内面7.5YR8/2灰白	口縁部スス付着
15	耕作土層下	須恵器鉢F(すり鉢)	底径7.4	外面自然釉 内面マメツ	外面2.5Y7/1褐灰 内面2.5Y6/1黄灰	内面はつるつる
16	表採	緑釉陶器壺	底径8.0	内外面 緑釉	外面5Y8/4淡黄-7/4浅黄 内面5Y8/4淡黄-7/4浅黄 断面5Y8/4淡黄-7/4浅黄	京都産
17	排土採集	土馬		ナデ	外面5YR6/6橙	
18	排土採集	土馬		ナデ	外面7.5YR7/4にぶい橙	
19	砂礫層上面層 (灰黒色粘質土)	土師器皿A	口径21.0	体部 ナデ 底部 ヨコケズリ	外面7.5YR8/4浅黄橙 内面7.5YR8/4浅黄橙	口縁部b形態
20	砂礫層上面 (灰黒色粘質土)	須恵器坏B	底径14.0	外面 体部ナデ 底部回転ヘラキリ→ナデ 内面 ナデ	外面5Y6/1灰-N6/灰 内面N6/灰	
21	砂礫層上面 (灰黒色粘質土)	須恵器双耳壺	口径20.6 器高14.5	外面 ナデ ケズリ 内面 ナデ	外面N6/灰-6/灰 内面N6/灰	耳部の接合前に 刻みを入れる
22	砂礫層上面A	土師器壺A		外面 ヨコミガキ 内面 板ナデ	外面5YR7/6橙 内面5YR8/4淡橙	把手の痕跡 精良な胎土
23	砂礫層上面	須恵器平瓶	口径8.8 器高8.6	外面 体部ナデ 体部下半ヘラケズリ 底部回転ヘラキリ→ナデ 内面 ナデ	外面N5/灰 釉7.5Y/1灰白 内面N6/灰	把手の痕跡 有回転ヘラキリ前 にヘラケズリ
24	砂礫層上面 暗灰色粘質土下	須恵器壺H	口径8.2 器高10.2	内外面 ナデ 底部 ヘラキリ未調整	外面N5/暗灰-2.5Y6/1(黄灰) 内面2.5Y6/1黄灰	ロクロ右回転

25	砂礫層上面A	壺(須恵器)	低径8.4	外面 体部ヘラケズリ 底部カキメ内面 ナデ	外面2.5Y6/1黄灰 内面N5/灰	ロクロ右回転
26	砂礫層上面 (灰黒色粘質土)	土師器壺	口径16.6	外面 ハケ内面 ヨコナデ	外面10YR7/2にぶい黄橙 内面7.5YR8/3浅黄橙	口縁部スス付着
27	砂礫層上面 Aブロック	土馬		草の茎のような工具で馬具を表現する 耳は破損している	外面7.5YR6/3にぶい褐	脚剥離痕有
28	砂層	土師器坏A	口径17.6 器高4.1	外面 口縁部ナデ 体部。底部ケズリ 内面 ナデ	外面7.5YR1にぶい橙-7.5YR6/8橙 内面10YR7/4にぶい黄橙	
29	砂層	土師器壺	口径2.9 器高8	外面 ハケ内面 拳による押圧痕	口縁外面10YR7/1黒 外面10YR7/2にぶい黄橙-2.5YR6/6橙 内面10YR6/6赤橙 5YR7/4にぶい橙 7.5YR5/2灰褐	
30	砂礫層と西区 (暗灰色粘質土層 下)	須恵器鉢	口径19.8 器高14.1	外面 ナデ 下半はヘラケズリ 内面 ナデ	内面5Y6/1灰 外面5Y6/1灰	ロクロは正置する と左回転
31	砂層	土師器蓋		内外面 マメツ	外面7.5YR7/3にぶい橙 内面7.5YR7/4にぶい橙	内面に暗文有
32	砂層Aブロック	把手付き碗	口径8.5 器高4.7	外面 ナデ 波状文 底部手持ちヘラ ケズリ 内面 ナデ	外面5Y6/1灰-5Y5/1灰 内面2.5Y6/3にぶい黄-2.5Y5/2暗灰黄	内外面自然釉 把手接着後に底部 ケズリ
33	砂礫層Aブロック	須恵器坏G蓋	口径9.5	内外面ナデ	外面N5/灰 灰釉2.5GY7/1(明ホリース灰) 内面N6/灰	自然釉かかる
34	砂礫層Aブロック	須恵器坏蓋	口径14.5	外面 天井部ヘラケズリ 口縁部ナデ 内面 ナデ	外面N6/灰 内面N5/灰	ロクロ右回転
35	砂礫層Aブロック	須恵器坏B	口径14.5 器高4.9	内外面 ナデ	外面2.5Y6/1黄灰-N6/灰 内面2.5Y6/1黄灰	
36	砂礫層	須恵器坏B	口径17.8	内外面ナデ	外面N4/灰 内面2.5GY6/1オリーブ灰	
37	砂礫層	須恵器坏B	底径10.0	内外面ナデ	外面N5/灰 内面N6/灰	
38	砂礫第1層 Bブロック	須恵器壺	口径15.4	外面 口縁部ナデ 体部自然釉薬 内面 アテ具痕	外面N6/灰口縁内 内面N6/灰体部	
39	砂礫層	須恵器壺	底径6.2	外面 ナデ 回転系キリ 内面 ナデ	外面N6/-N8/ 内面N4/	ロクロ右回転 底部系切り
40	砂礫層	須恵器高坏	口径10.8	内外面ナデ	外面7.5Y5/1灰 内面2.5Y7/1灰白	2方透かし ロクロ右回転
41	砂礫層	土師器坏C	口径18.0	外面 体部ミガキ 底部ヘラケズリ 内面 2段放射暗文	外面10YR7/2にぶい黄橙-2.5YR6/6橙 内面10YR7/2にぶい黄橙	
42	砂礫第1層 Bブロック	土師器壺	口径20.4	外面 ハケ 内面 口縁部ナデ 体部ユビオサエ	外面10YR5/2灰黄色 内面10YR7/3にぶい黄橙	チャート含む
43	第1砂礫層 Aブロック	土師器皿A	口径26.4 器高2.6	外面 ミガキ 内面 2段放射暗文	外面5YR8/4橙 内面2.5YR6/6橙	
44	砂礫第2層 Bブロック	平瓦		凸面縄タタキ 凹面布目	10Y6/1灰	
45	黒褐色土	軒丸瓦			7.5Y5/1灰	6225A型式 積み上げ一本造り 技法

第2節 纏向遺跡第44次調査

1. はじめに

纏向遺跡第44次調査は大字東田字ヤナイタ178番で個人住宅の建設に伴う範囲確認調査として行った。纏向遺跡でも西側に所在し、東田大塚古墳の北東約160m地点、矢塚古墳から南東約180m、纏向石塚古墳から南西約180mと周囲を出現期の古墳に囲まれた場所に立地する。周辺では北約25mに第30次調査¹⁾が、北約40mに第25次調査²⁾が行われている。また北東に約160m地点ではベニバナ花粉を検出した第61次調査³⁾が行われており、纏向遺跡のなかでも比較的調査が行われている一帯である。

調査区周辺は纏向遺跡のなかでも太田微高地上に所在する。北側には太田北微高地との間に旧流路が存在し、現在でもわずかな谷地形となっている。なお第44次調査については既に橋本輝彦が纏向遺跡所在の小規模な墳墓を集成するにあたり、一例として取り上げているが⁴⁾写真や出土遺物は未報告のため改めて報告するものである。調査は昭和60年6月15日から7月27日にかけて行なった。調査面積は100㎡である。

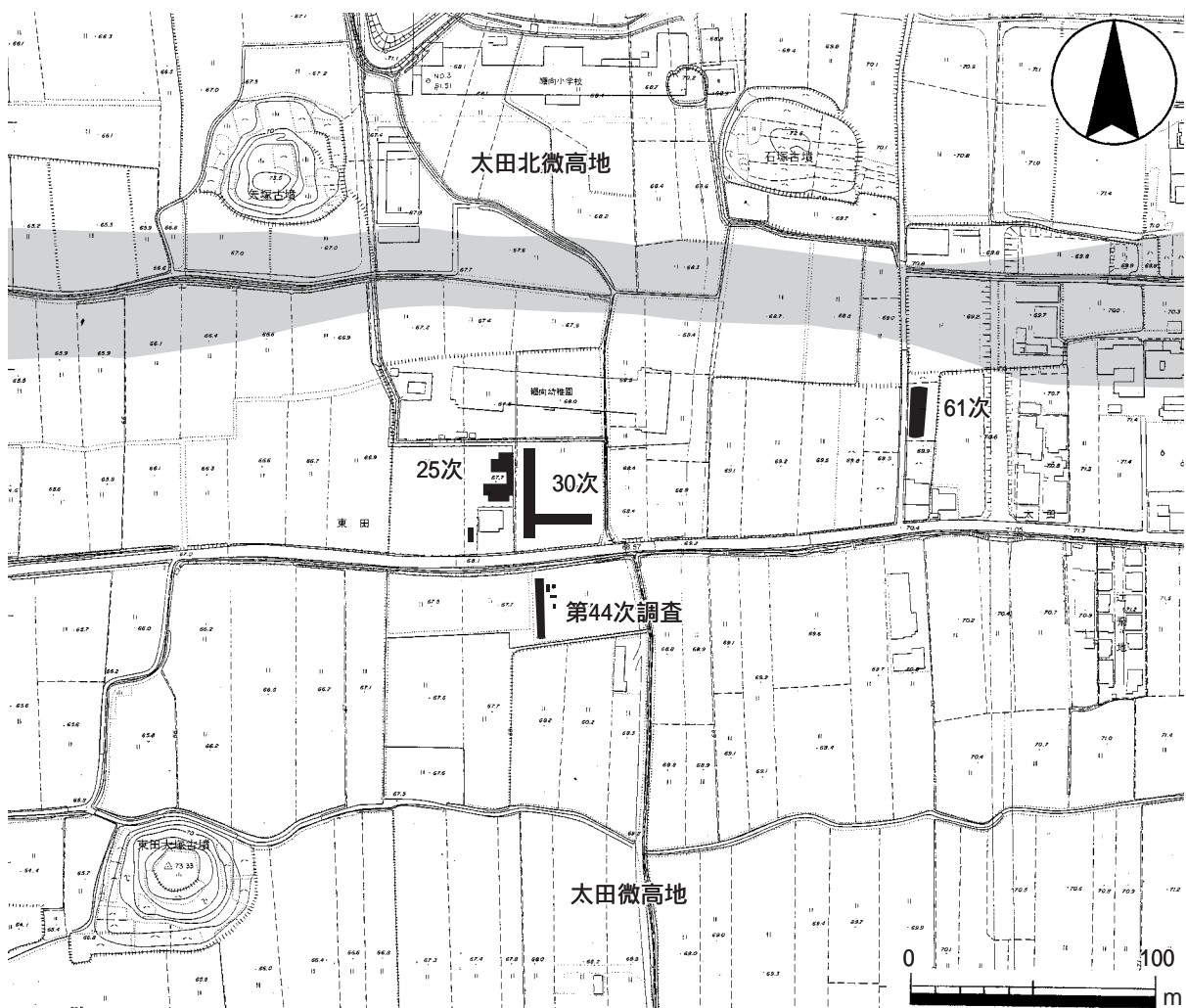


図8 纏向遺跡第44次調査地の位置 (1/3000)

2. 調査の方法と層序

調査区は5か所に分散しており、本調査区は東西約3.3m、南北約24mをはかる。さらにその東側に1m×2.4m、1m×2.7m、1m×1m、1m×1mの調査区を設けている。調査に当たっては4mグリッドで地区割りしている。例えば3C区であれば3Cの交点の南東側となる。また、調査区の名称は既住の報告に従った。⁵⁾

基本層序は上から現代耕作土、淡茶褐色土、暗灰褐色土、淡灰黄褐色土（地山）や淡黄白色土である。なお分層は遺構が壁面にかかる箇所のみなされているため、調査区全体の層序は不明である。遺構は地山面を切り込んでいる。地表面の標高は67.4m前後、地山面の標高は67.2m前後をはかる。地山は徐々に北側に下るものと考えられる。主な遺構として本調査区で溝Aと溝Bを検出している。

3. 遺構

溝A 溝Aは長さ10.5m以上、幅約1.3m前後、深さ約0.4mの南北溝で、溝Aの北端は調査区内で東に直角に折れる。方形周溝墓の周溝の可能性はある。層序は図10の通りである。東壁で溝Bとの切りあい関係があり、溝Bが新しい。

上層には暗灰褐色土（13層）や黒褐色土（14層）が含まれ、中層には土器を多量に含む粘土層（17、18層）が認められる。最下層（24、25層）には地山の流入土がみられる。もう一方の断面では、上層に粗砂混り黒褐色土が、下層に淡灰色粘土層が認められる。溝は南側に行くほど深くなる傾向にあり、東側に折れ曲がるコーナー部分が約0.15m高くなる。コーナー部分より土器が出土したとのことである。コーナー部分での遺物出土状況図・写真が記録されているが、個々の遺物の同定はできなかった。

この溝を方形周溝墓の周溝とすると、一辺約10m前後になるとみられる。時期については後述する土器からみて、最終的に布留式期初頭に埋没しているとみられる。

溝B 溝Bは長さ3.2m以上、幅約2.4m、深さ約0.25mの東西溝で、本調査区を横断する。遺物の量はコンテナ半箱程度と少ない。図11では7層は攪乱の可能性が調査の段階で指摘されているので、8層以下が確実な堆積となる。最下層には地山に似るが若干粗砂の混じる層が認められる。一方で東断面では最下層にも灰褐色粘質土が堆積し、わずか3mで大きく堆積状況が異なっているものと考えられる。その性格は不明である。埋没時期は布留式期以降と考えられる。

4. 出土遺物

遺物は全体で26340g出土している。ほぼ全て土器である。溝Aは14475g、溝Bは1720gとなる。図示した遺物はいずれも溝A出土のものである。地区ごとに出土量を勘案すると、溝Aコーナー部分の3C区出土土器が多く2705g、3Dは5850g、3Eは365gと、溝Bとの交差部分では少ない傾向にある。調査担当者の知見と一致する。1～2は暗灰褐色土出土。布留形甕が含まれる。4～19、21、22、25～27は黒褐色土、黒褐色土出土で確実な布留形甕を含まない。8は弥生形甕であるが底部外面をヘラケズリし丸底に仕上げしており、強く庄内形甕や布留形甕の形状を意識している。9、10は剥落が著し

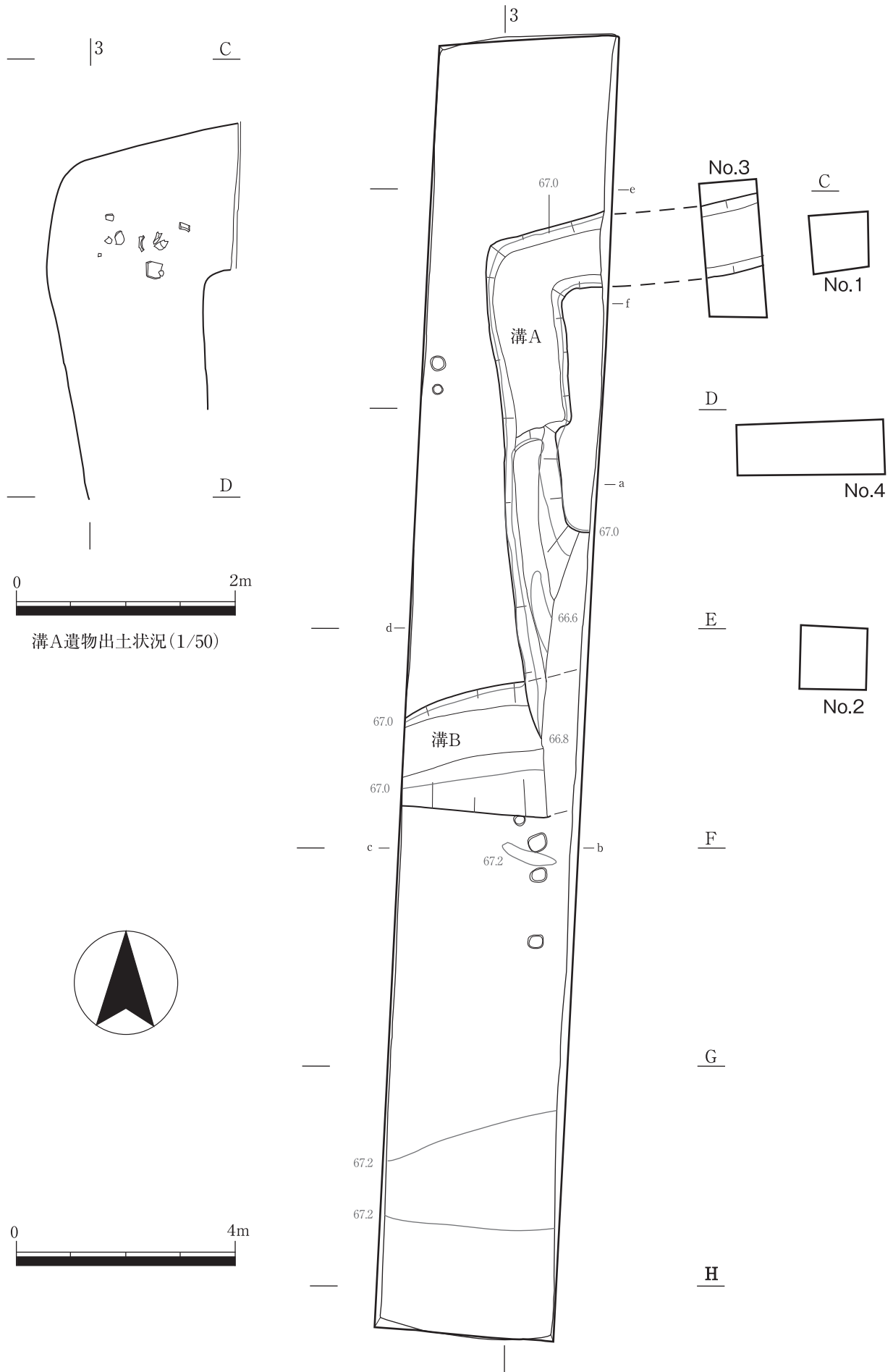


図9 纏向遺跡第44次調査平面図 (1/100)

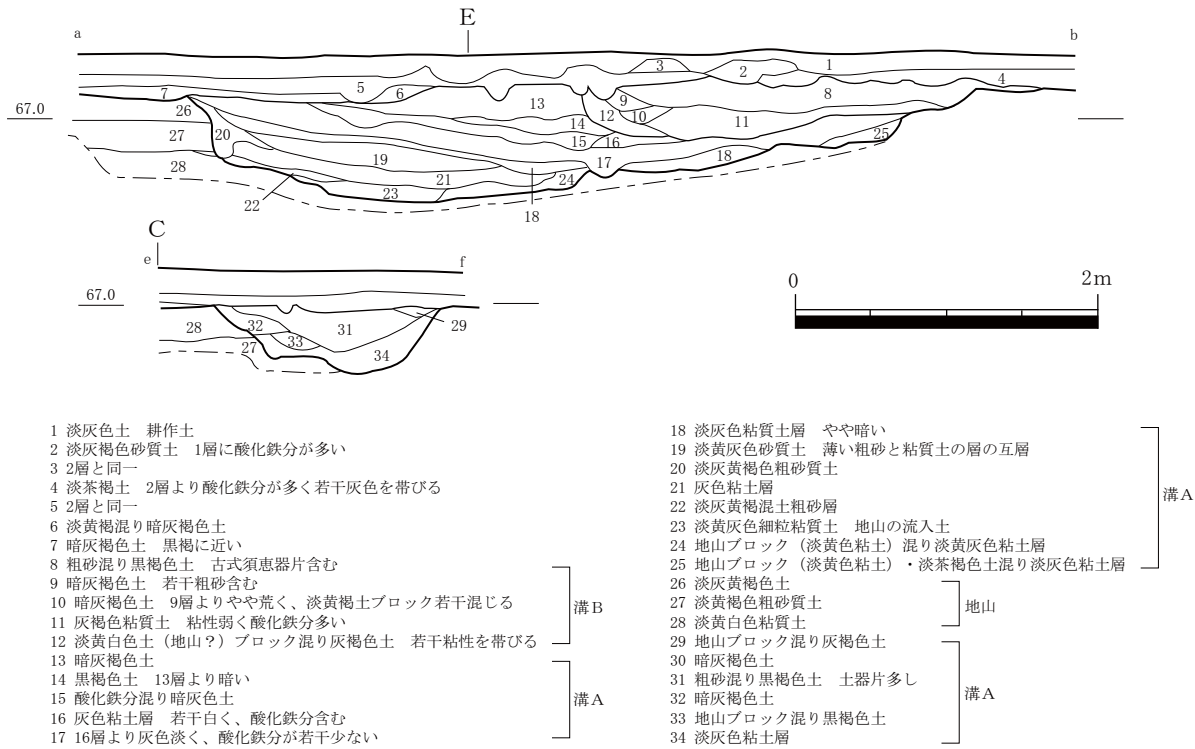


図10 纏向遺跡第44次調査東壁断面図 (1/50)

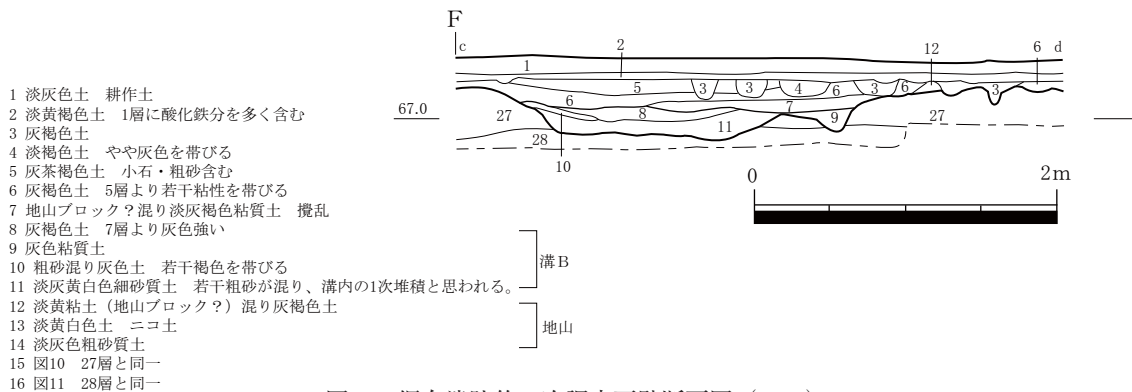


図11 纏向遺跡第44次調査西壁断面図 (1/50)

いが外面にタタキが見当たらない。器台では中空の個体がみあたらない。外来系の個体として、11の外面全面ハケ調整の庄内河内形甕や22の二重口縁壺、25の山陰系の壺、26、27のS字甕がある。

断面図上では図10の17、18層に多量の遺物が含まれることが記載されるが、実際の遺物では粘土層から取り上げられた個体は多くなく黒褐色土層が8745gと過半を占める。そのため断面図の黒褐色土が遺物取り上げ段階の黒褐色土であるかどうかには若干疑念が残る。また調査担当者はおおむね溝Aの出土遺物年代を庄内式期後半ととらえているが、暗灰褐色土から布留形甕も出土しており、最終的な埋没年代は布留式期初頭に下るとみられる。一方黒褐色土から確実な布留形甕が出土しないことや、庄内形甕口縁部がd、e1、e2形態をとるもので占められること、弥生形甕の底部外面を削って丸底化する個体があること、器台や低脚高坏の形状からみて溝の大半の埋没時期は庄内3式期とみられる。

溝Bからは布留形甕が出土している。層位からみても布留式期以降と考えられる。また図10の8層に須恵器を含むことから、古墳時代中期に下る可能性がある。

5. まとめ

第44次調査地では、方形周溝墓の可能性のある溝を検出した。この一帯では纏向石塚、東田大塚、矢塚古墳といった全長100m前後の大規模な前方後円墳のほか、一辺10m前後の方形周溝墓も複数検出していることから纏向遺跡の墓域の一つとして挙げられる。いまのところこの一帯の方形周溝墓には庄内式期でも前半に遡るものはみあたらず、庄内式期前半の方形周溝墓が複数検出されている⁶⁾ 纏向遺跡太田地区とは対照的である。纏向遺跡における墳墓築造を考えるうえで重要な資料といえよう。

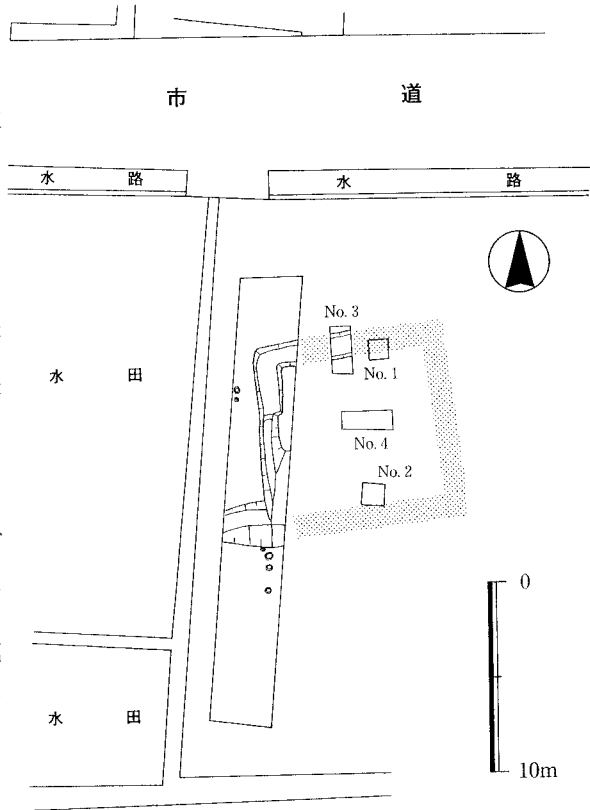


図12 想定される方形周溝墓（1/400）（橋本2006）

【注記】

- 1) 萩原儀征1982『纏向遺跡昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報』桜井市教育委員会
- 2) 萩原儀征1980『纏向遺跡昭和54年度遺跡範囲確認発掘調査概報』桜井市教育委員会
- 3) 橋本輝彦2014『纏向へ行こう！ 纏向遺跡ガイドマップ』桜井市埋蔵文化財センター
- 4) 橋本輝彦2006「纏向遺跡の墳墓について～小規模な埋葬施設の検討から～」『東田大塚古墳 奈良盆地東南部における纏向型前方後円墳の調査』（財）桜井市文化財協会
- 5) 橋本輝彦2006「既往の調査」『東田大塚古墳 奈良盆地東南部における纏向型前方後円墳の調査』（財）桜井市文化財協会
- 6) 桜井市教育委員会2017『纏向遺跡第193次調査現地説明会資料』

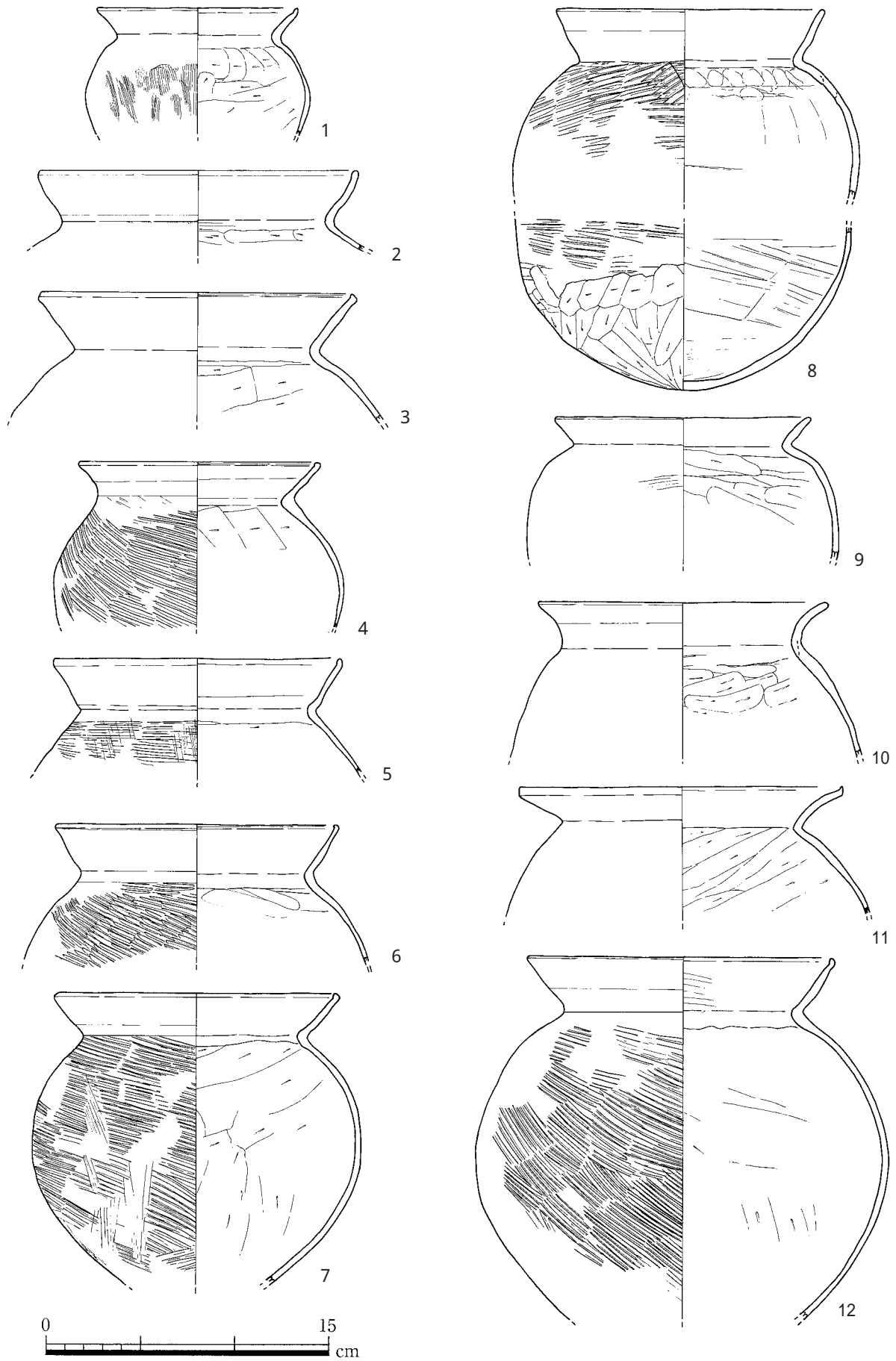


图13 纏向遺跡第44次調査溝A出土遺物1 (1/3)

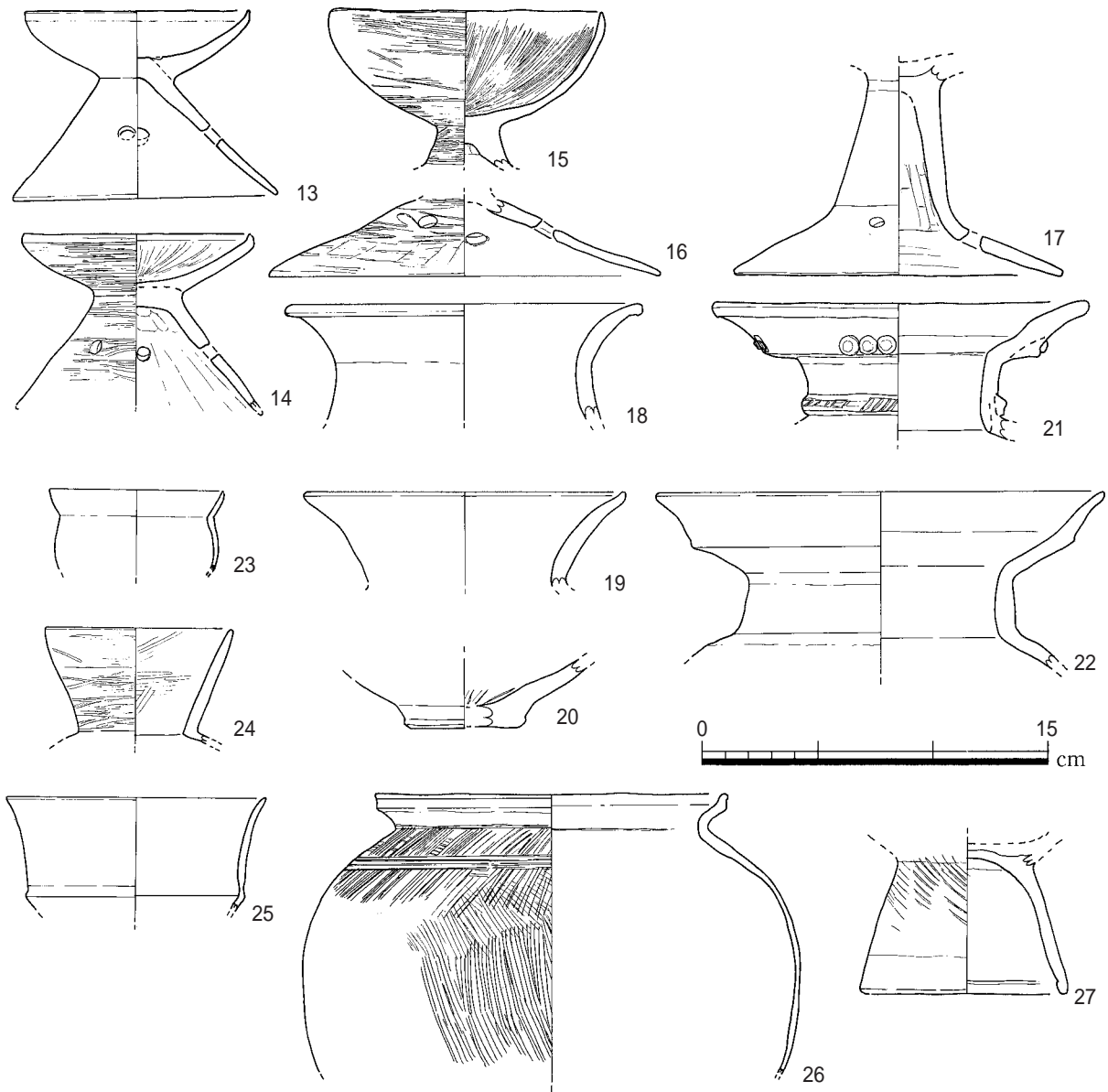


図14 纏向遺跡第44次調査溝A出土遺物2 (1/3)

表3 遺物観察表

報告No.	地区 層位	器種・形式	法量 (復元) cm	口縁部	調整	色調	備考
1	A溝暗灰褐色土	布留形甕	口径10.6	e1	外面ハケメ 内面ハラケズリ	外7.5YR7/4にぶい橙 内10YR5/2灰黄褐- 10YR5/4灰褐	外面スス多い
2	3D A溝暗灰褐色土	布留形甕	口径16.9	h	外面マメツ タテハケ 内面ケズリ	外7.5YR7/4にぶい橙 内5YR7/6橙断 7.5YR7/6橙	
3	3C A溝灰褐色粘質土	布留形甕	口径 16.6	g1	外面マメツ 内面ケズリ	外 5YR7/6 橙 内 7.5YR8/4 浅黄橙	
4	C A溝黒褐色土 3D A溝黒褐色土	庄内大和形甕	口径12.8	e1	外面タタキ 内面ケズリ	外7.5YR8/2灰白 内7.5YR7/3にぶい橙	
5	C A溝黒褐色土 3C A溝黒褐色土	庄内大和形甕	口径15.3		外面タタキ→タテハケ 内面ケズリ	外5YR6/4にぶい橙 ス ス7.5YR5/1褐灰 内7.5YR6/3にぶい褐	

6	3D A満黒褐色土	庄内大和形甕	口径15.0	d	外面タタキ 内面ケズリ	外5YR6/4橙 内7.5YR4/2灰褐	備考
7	A満中下層暗黒褐色土 CA満黒褐色土	庄内大和形甕	口径15.0	e2	外面タタキ→タテハケ 内面ケズリ	外7.5YR6/4にぶい橙 内N3/0暗灰	スス付着
8	3EB満暗灰褐色粘質土 3DA満黒褐色粘質土3DA 満黒褐色土3EA満暗灰褐色 粘質土3EA満黒褐色粘質 土		口径14.1	a	外面タタキ 下半ケズ リ 内面板ナデ	外2.5YR6/8橙-5YR6/8 橙 内5YR6/4にぶい橙	ケズリは逆置して 底に向かって削 る。上半と下半は 接合しない
9	3D A満黒褐色土	系譜不明の甕	口径13.6	a	外面ヨコハケ 内面ケズリ	外5YR7/6橙 内5YR7/6橙	外来の土 脆い
10	3D A満黒褐色土	系譜不明の甕	口径15.3	a	外面マメツ 内面ケズリ	外7.5YR7/6橙 内7.5YR8/6橙	
11	C A満黒褐色土	庄内河内形甕	口径17.1	d	外面ハケメ?見えない 内面ケズリ	外7.5YR6/4にぶい橙ス ス10YR3/1黒褐 内7.5YR7/4にぶい橙	外面はタタキが見 えない
12	A満上層炭混じり黒褐色 A満黒褐色	庄内大和形甕	口径16.3	e2	外面タタキ→タテハケ 内面ケズリ	外7.5YR8/3浅黄橙 内7.5YR8/4浅黄橙	
13	A満上層炭混じり黒褐色土	器台C3	口径9.7器高 8.2		内外面マメツ	外7.5YR7/6橙 内7.5YR7/6橙	おそらく3方透か し
14	C A満黒褐色土	器台C3	口径9.9		外面ヨコミガキ受け部 放射状ミガキ脚 内面板ナデ	外7.5YR7/3にぶい橙 内7.5YR7/4にぶい橙	3方透かし
15	3D A満黒褐色土	高坏E3?	口径11.7		外面ヨコミガキ 内面放射状ミガキ	外5YR6/6橙 内5YR6/6橙-5YR6/4に ぶい橙	
16	3D A満黒褐色土	高坏E3	底径16.9		外面ヨコミガキ 内面マメツ	外5YR7/6橙 内5YR7/6橙	
17	3C A満黒褐色土	高坏	底径14.15		外面マメツ 内面板ナデ・ケズリ	外7.5YR7/6橙 内7.5YR6/4 にぶい橙	接手法a 3方透かし
18	3C A満黒褐色土	壺	口径15.2			外5YR6/8橙 内7.5YR6/1褐灰	
19	3C A満黒褐色土	広口壺C	口径13.8		内外面ナデ	外7.5YR6/3にぶい褐 内7.5YR6/3にぶい褐	
20	3D A満灰褐色粘質土	壺	口径4.6		外面ユビオサエ 内面板ナデ	外7.5YR5/3 にぶい褐 内10YR5/2 灰黄褐	
21	3C A満黒褐色土	二重口縁壺B	口径16.2		外面竹管文・刻み 内面マメツ	外7.5YR7/4 にぶい橙 内5YR7/8橙	外来の胎土
22	3D A満黒褐色土	二重口縁壺A	口径19.3		外面 ミガキほぼマメ ツ 内面 口縁部ミガキほ かマメツ	外5YT7/6橙 内7.5YR8/6浅黄橙	外来の胎土か
23	3D A満灰褐色粘質土	小型丸底鉢II A	口径7.5		マメツ	外5YR6/6橙 内7.5YR5/3 にぶい橙	
24	3D A満灰褐色粘質土	壺	口径8.1		内外面ミガキ	外5YR6/6橙 内5YR6/6橙	小型丸底壺ではな い
25	A満上層炭混り黒褐色土 3D A満黒褐色土	山陰系壺	口径11.2		内外面マメツ	外5YR7/6橙-6/6橙 内2.5YR6/6橙	在地の胎土か 山陰系の壺
26	3D A満黒褐色土A満上層 炭混り黒褐色土A満中層 暗黒褐色土	S字状口縁甕	口径15.2		外面ハケメ 内面ナデ	外10YR7/2にぶい黄橙内 10YR8/2灰白-7.5YR4/2 灰褐	外来の胎土
27	3D A満黒褐色土	S字状口縁甕	底径8.8		外面ハケメ 内面ナデ	外7.5YR7/3にぶい橙 内7.5YR6/3にぶい褐	外来の胎土

第3節 纏向遺跡第58次調査

1. はじめに

纏向遺跡第58次調査は大字箸中字河原531番1、4、5で個人住宅の建設に伴う範囲確認調査として行った。纏向遺跡の南縁、箸墓古墳の東約490m地点にあたる。周辺では約25m北側で第135次調査¹⁾が行われ、弥生時代後期後半の溝などを検出している。調査区南側には纏向川が流れ、調査区は川による谷地形内に位置する。調査区は長さ約12m、幅約3mの東西トレンチを設け、西端に長さ3m、幅2mの拡張区を南側に設けたL字形をなす。

調査は平成元年10月23日から11月16日にかけて行なった。調査面積は54㎡である。

2. 調査の方法と層序

層序は上から現代耕作土、淡灰褐色土（耕土）、淡灰色土混り砂礫層などの砂質土、無遺物で人頭大の礫層（16層）となる。平面図では記録がないが、出土遺物には中央溝と近世土坑と注記されたものがある。16層は南側に存在する纏向川によって形成された蓋然性が高い。つまり調査区全体が旧流路内に位置すると考えられる。第135次調査では地山層が検出されているので、旧流路の北岸は調査地北側の比高差1m程度の段差と考えられる。

3. 出土遺物

遺物はコンテナ2箱、87140g出土している。全体に細片が多い。断面図に示された層と遺物の出土層位の関係が不明な遺物が多いものの、16層から出土した遺物はない。遺物の多くが古式土師器であ



図15 纏向遺跡第58次調査地の位置（1/2000）

る。ただし取り上げた遺物袋には中世の土器が含まれるものがほとんどで、15層以上は中世以降に形成されたものと考えられるべきである。中世土器には土師器皿や法量の縮小した瓦器碗、土師器羽釜が含まれる。第135次調査でも14世紀の瓦器碗が出土しており、当該期に活動があったことがわかる。また近世土坑には寛永通宝が含まれる。

4. まとめ

本調査区では明確な遺構は記録されていないものの、古式土師器が多く存在することから、付近に遺構が存在することが予想される。その後活発な土地利用は中世まで待たねばならない。下層には無遺物の人頭大の礫層が全面に広がっており、纏向川によって形成されたと考えられる。

【注記】

1) 福辻淳2004「纏向遺跡第135次発掘調査報告」『桜井市 平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

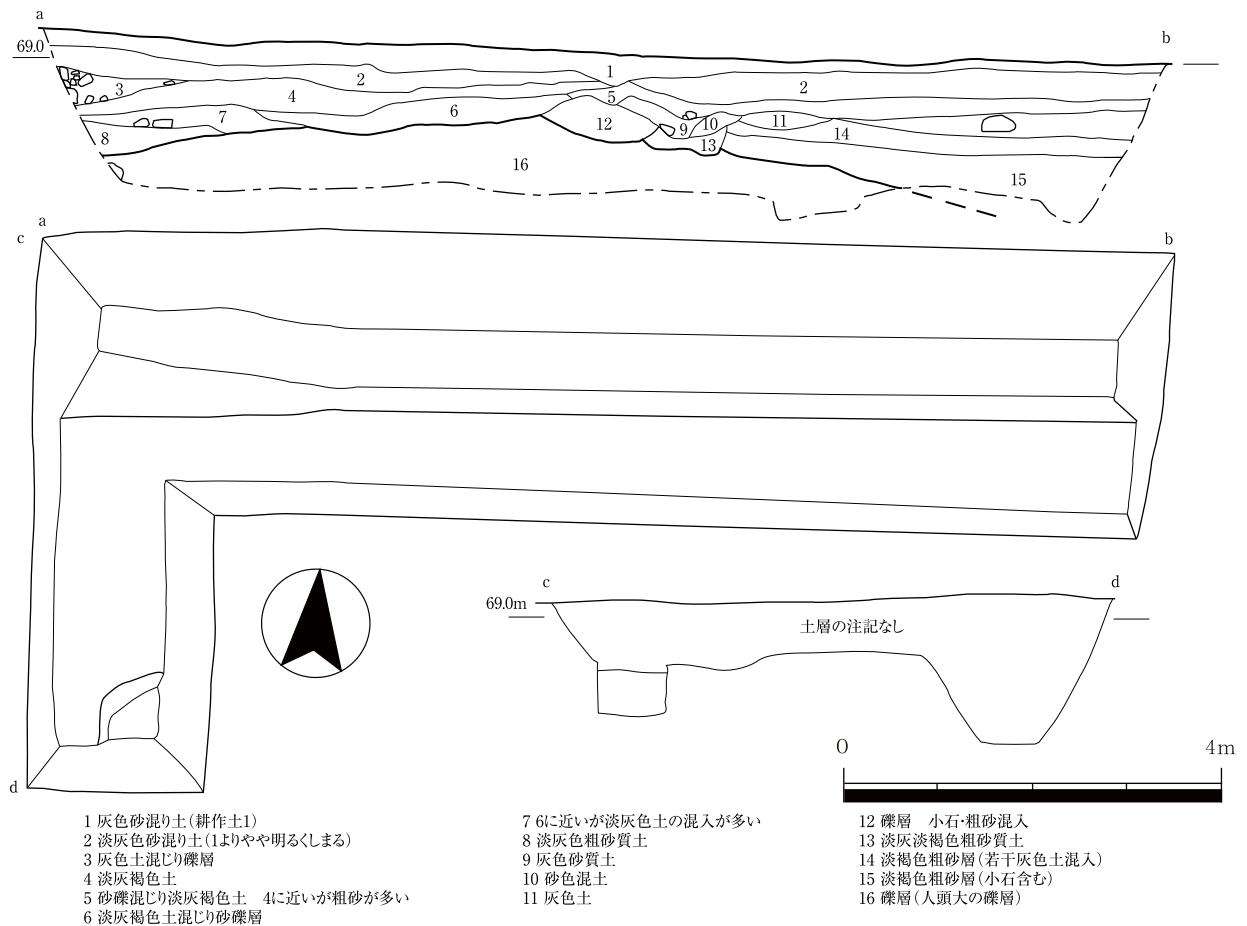


図16 纏向遺跡第58次調査平面・断面図 (1/80)

第4節 纏向遺跡第78次調査

1. はじめに

纏向遺跡第78次調査は大字巻野内字玉井466番、467番で個人住宅の建設に伴う範囲確認調査としておこなった。調査地は纏向遺跡の北縁、珠城山古墳群の北西の麓にあたる。調査地の周辺では東隣接地で第104次調査が¹⁾、北東に約12mで巾着状布製品などが出土した第65次調査²⁾が、北約85mで布留式期の居館に関わるV字溝を検出した第80次調査³⁾が行われており、周辺は纏向遺跡の中でも布留式期中枢的な位置を占める可能性が指摘されている。調査区は南北約32m、東西約3mの調査区北端に、西へ幅3m、長さ約9mの調査区を接続したL字形をなす。調査あたっては任意の4mグリッドで地区割りしている。調査期間は平成6年3月7日から3月31日で、調査面積は130㎡である。

2. 基本層序と地形

調査地は珠城山丘陵より下る地形のため、南東が高く、北西に低くなる地形となっている。

現地表から深さ0.5mの耕作土があり、その下に床土、素掘り溝層が広がる。土層注記には層の性格について言及がほとんどないため、どの層から地山であるのか、あるいはいずれの層が遺構埋土であるのかといった情報が不明な箇所が多い。地山面かそれに近いと考えられる掘削停止面は南に行くほど高く、南端で標高90.5m前後、北西端では標高88.6mとなり、比高差1.9mをはかる。

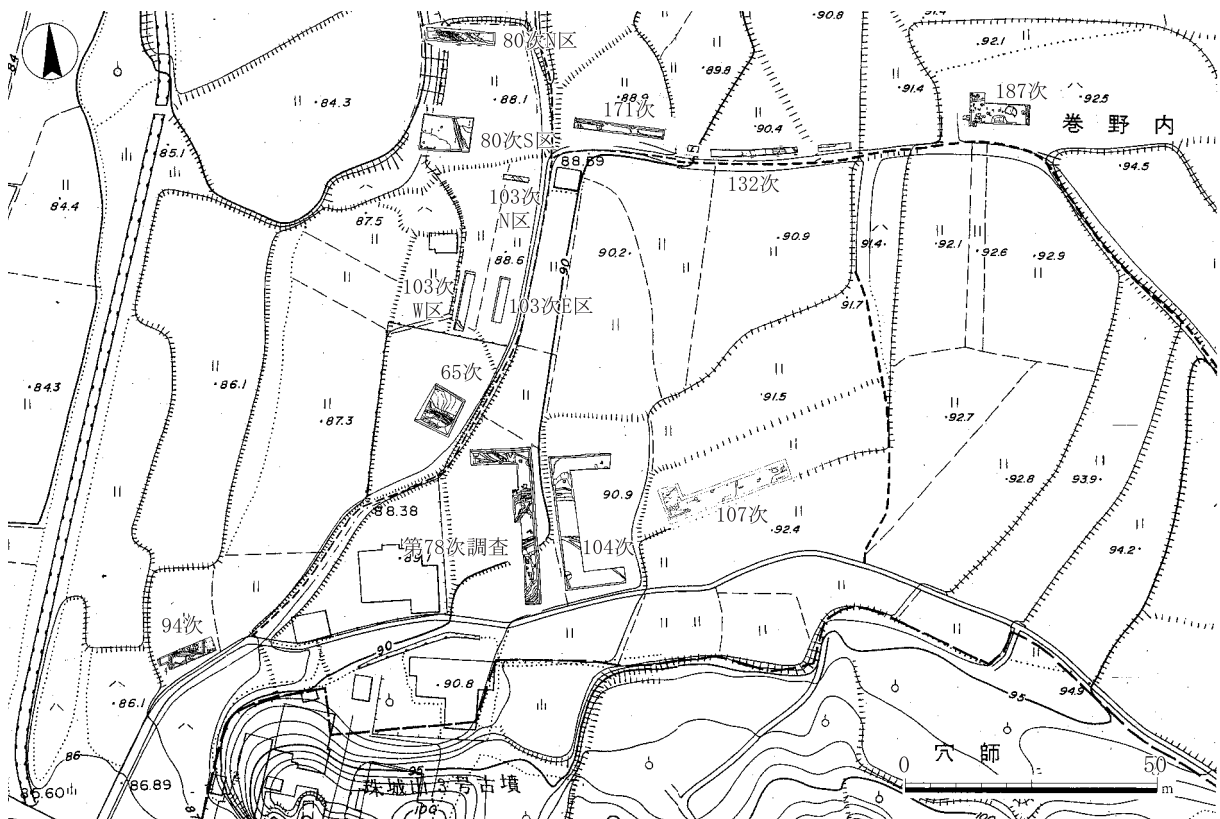


図17 纏向遺跡第78次調査地の位置 (1/1500)

3. 遺構 (図19～24)

溝や落ち込みを複数検出している。調査区の南端では複数の素掘り溝を検出している。8eライン付近で暗渠を検出している。ただし現代の地割りと平行していることからみて比較的新しいものである。ここでは古墳時代に遡るとみられる遺構について記述する。

溝1 7eラインから5eラインにかけて、溝1を検出している。溝1は幅約1.7m、深さ約0.8mをはかる断面V字形の東西溝で、調査区を西に拡張したところ南に屈折することが判明した。両端が調査区外に伸びるため全長は不明だが、隣接する第104次調査検出分を合わせると東西約8m以上、南北約4m以上をはかる。土層の堆積状況については不明な点が多いが写真と図24の土層注記を見る限り、下層は地山の流れ込みの可能性がある、中層には有機物に由来するとみられる暗褐色の層がみられる。上層には礫が含まれる層が多い。後述する土器からみて古墳時代後期に埋没した可能性と、より古く古墳時代前期に埋没した可能性の両者が考えられる。また、溝の下底面ではピット状の落ち込みが認められる。

溝2 調査区北西では溝2を検出している。溝2は幅約0.4m、長さ約4.1m以上、深さは約0.15mと考えられる。北西端では溝2を切って落ち込みが確認されているが詳細は不明である。写真や図では多数の遺物が出土していることが判明する。溝2出土土器は時期の判明する遺物が少ないため、細かな時期決定は難しいが布留式期に埋没したと考えられる。

4. 遺物 (図18)

コンテナ2箱分、重さ11910gの遺物が出土している。ほとんどが土器の細片である。

溝1 1155gが出土している。この中には、上層出土の1・2のようにTK10型式期を前後する時期の須恵器も含まれている。ただし、溝1と明らかに繋がるとみられる第104次調査検出溝では3世紀末頃の遺物しか出土しておらず、同じく溝1と接合する可能性が指摘されている第107次調査検出の溝では布留1式期の遺物が出検されている。また出土遺物も古墳時代中・後期に下る遺物はごく少なく古式土師器が大半である。そのため上層の遺物が混入している可能性も否定できない。1・2を混入であるとすれば、溝1は3のような布留形甕が含まれることから布留式期の所産と考えられる。

溝2 645gの土器が出土した。5～6のように古式土師器のみである。布留式期の所産と考えられる。このほか、包含層からは古墳時代前期から後期の遺物が出土している。このほか宋銭の景德元寶が素掘り溝から出土している。

5. まとめ

以上のように第78次調査では断面V字形の溝などを検出した。この溝は前述のように布留式期の第104次調査検出の溝と接続する。また第107次調査検出の溝とも関連する可能性がある⁴⁾。この仮説が正しいなら、珠城山丘陵北麓に複数の溝が掘られていることとなる。周辺の調査では、第80次調査で検出した柵列を伴うV字溝や第50次調査の木製槽など、布留1式期には活発な人間活動が行われてお

り関連性が想定できる。

一方で、古墳時代後期の遺物が含まれることも重要である。古墳時代後期には3基の前方後円墳で構成される珠城山古墳群が第78次調査地の約50m南側で築造される。また、第187次調査⁵⁾では古墳時代後期の可能性がある掘立柱建物が検出されているほか、第104次調査では古墳時代後期の整地層が検出されている。古墳時代後期の遺物の検出はこういった周辺での活動に関連するものであろう。

【注記】

- 1) 橋本輝彦1998「纏向遺跡第104次調査報告」『桜井市 平成9年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 2) 橋本輝彦2013「纏向遺跡第65次調査の概要と巾着状布製の分析について」『纏向学研究』第1号 桜井市纏向学研究センター編
- 3) 橋本輝彦1995「纏向遺跡第80次発掘調査報告」『桜井市 平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会
- 4) 松宮昌樹1999「纏向遺跡第107次発掘調査報告」『桜井市 平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 5) 飯塚健太2017「纏向遺跡第187次発掘調査報告」『桜井市 平成27年度 国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

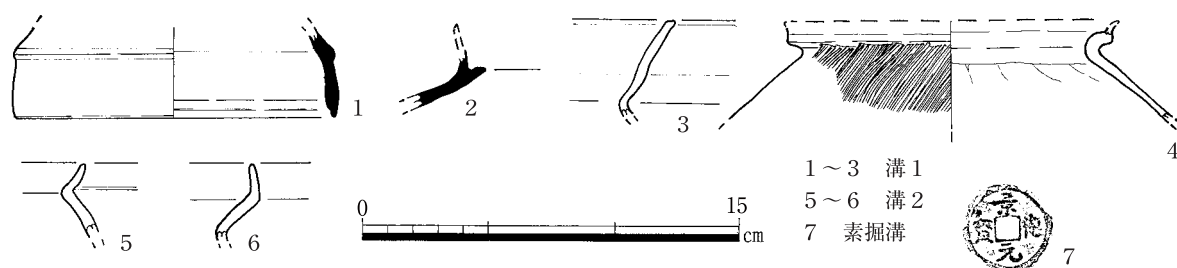


図18 纏向遺跡第78次調査出土遺物 (1/3)

表4 遺物観察表

報告 No.	地区 層位	器種・形式	細別形式等	法量 (復元) cm	調整	色調	備考
1	5-6E間 溝1 黄灰褐色礫 混土上層	須恵器坏蓋		口径12.6	外面：ロクロナデ内面：ロクロナデ	外N7/0灰白 内N7/0灰白 断N6/0灰	口径不安ロク ロ右回転か
2	5-6E間 溝1 黄灰褐色礫 混土上層	須恵器坏身			外面：ロクロナデ内面：ロクロナデ	外N7/0灰白 内N7/0灰白 断N7/0灰白	
3	5-6E間 溝1 暗灰褐粘土 層	甕			外面：ナデ内面：ナデ	外10YR8/4浅黄橙 内10YR8/4浅黄橙 断10YR6/1褐灰	山陰系の甕
4	5E-F間 溝1 埋め土1	S字状口縁甕		口径13.1	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ユビオサエ	外5YR7/8橙 内5YR6/8橙 断7.5YR6/4にぶい橙	外来の胎土
5	4 B-C間 溝2 淡灰色シ ルト層	小型丸底鉢			外面：ナデ内面：ナデ	外5YR7/6橙 内5YR6/8橙 断5YR5/1褐灰	
6	4 B-C間 溝2 淡灰色シ ルト層						吉備系の甕
7	素掘り溝	景德元寶		直径2.3 重量2.0g			

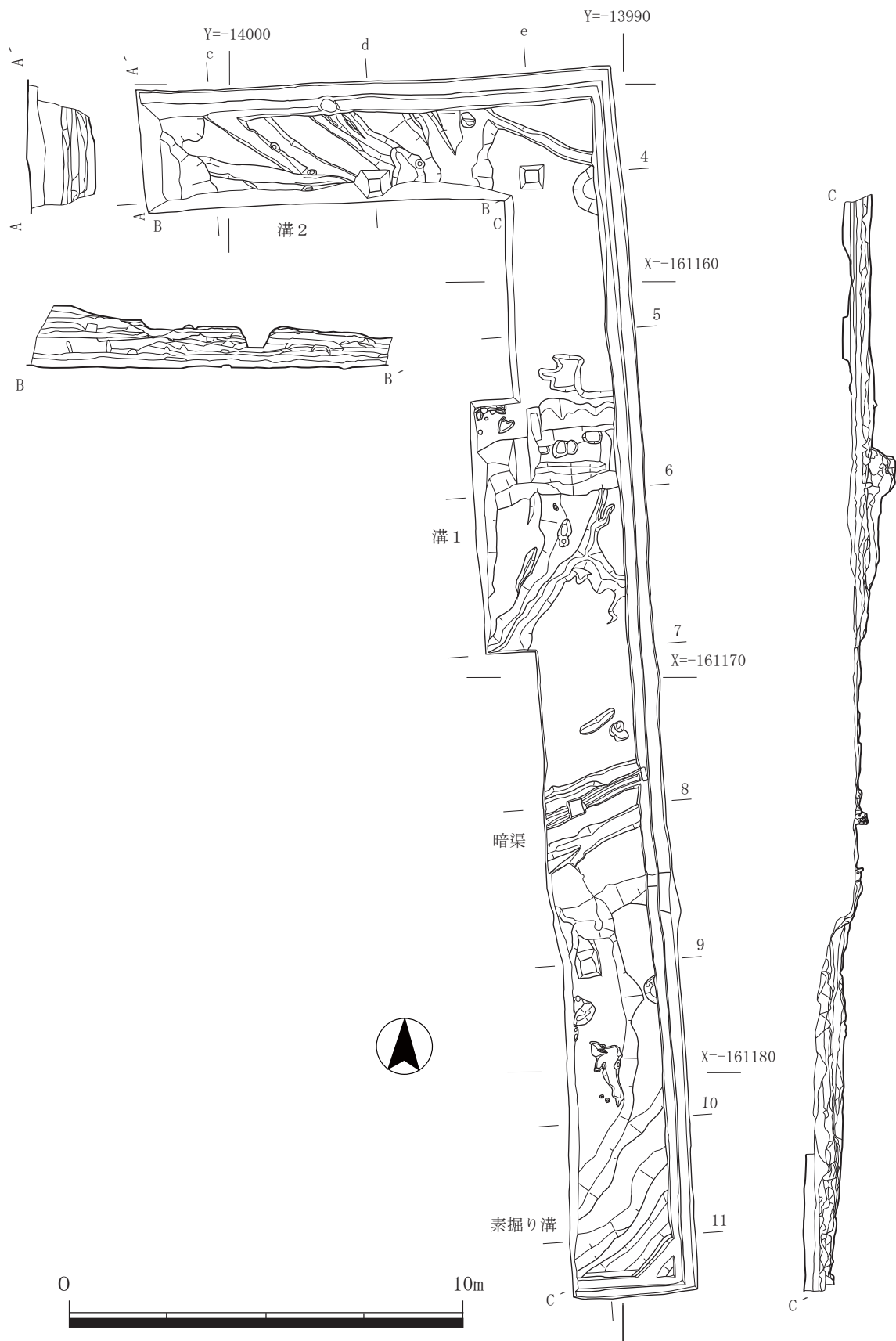


図19 纏向遺跡第78次調査遺構全体図 (1/150)



図20 調査区南半平面 (1/80)・断面図 (1/40)



图21 調査区北半平面 (1/80)・断面図 (1/40)

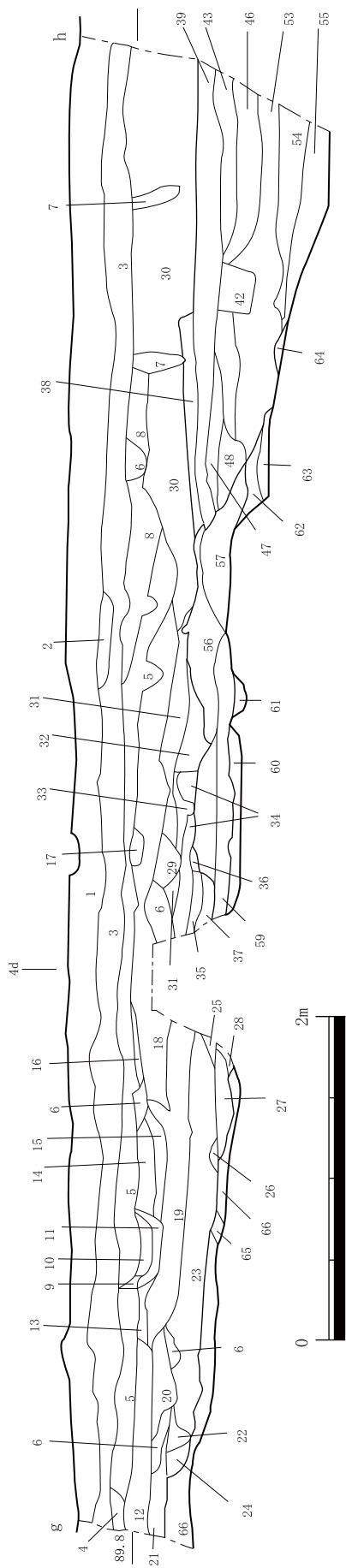


図 22 調査区西半南壁 (1/40)

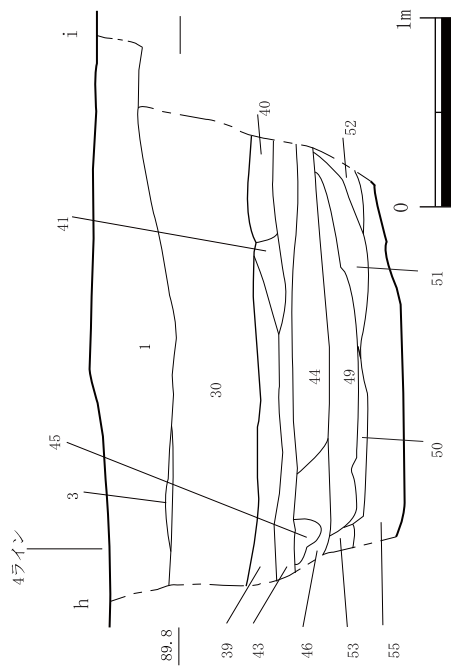
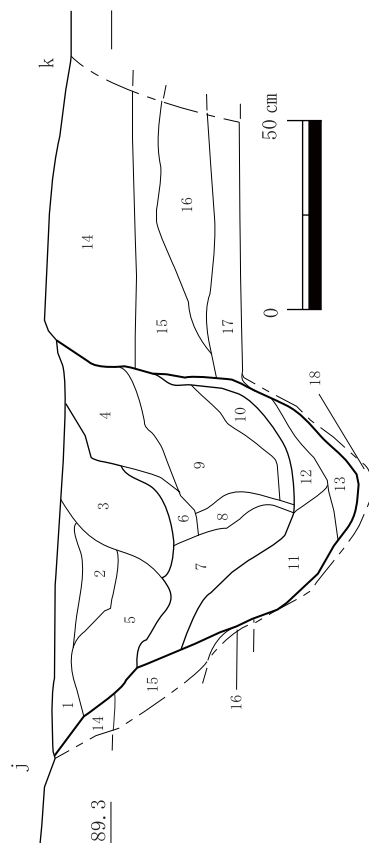


図 23 調査区西半西壁 (1/40)



- | | |
|--|--|
| <p>1 暗灰褐色粗砂層 (1mm以下の砂礫で構成され
黄褐色、草蓍灰色シルトブロックを含む)
2 浅黄灰色シルト層 (0.1mm以下の砂礫で構成され
暗灰褐色、黄褐色シルトブロックを含む)
3 2と同じだが黄褐色シルトが2より多い
4 2と同じだがブロックは殆どない
5 暗灰褐色混土粗砂層 (1mm以下の砂礫で構成され、
淡黄灰色シルト、土器片を含む)
6 暗灰褐色粗砂層 (4よりやや暗く、同色の粘土
ブロック、土器片を含む)
7 暗褐色粘質土 (0.1mm以下の砂礫で構成され、
淡灰色シルトブロックを多量に含む)
8 とほぼ同じで粘土ブロックの量が多く、
淡灰色シルトブロックが混じる。</p> | <p>9 黄灰色砂礫層 (1cm以下の砂礫で構成され、
5cm大の礫を含む)
10 暗灰褐色粗砂層 (4よりやや暗く、同色の粘土
ブロック、土器片を含む)
11 淡灰色シルト層 (0.1mm以下の砂礫で構成され、
同色の粘土ブロックも混じる)
12 淡灰色粘質土 (0.1mm以下の砂礫で構成される)
13 12と同じでやや明るく若干砂が混じる
14 黄褐色土 (2mm以下の砂礫で構成され、
5cm以上の石も若干入る)
15 淡褐色粘質土 (3mm以下の砂礫で構成される)
16 15と同じで砂礫層 (3mm以下の砂礫で構成される)
17 淡灰色粘質土 (2mm以下の砂礫で構成される)
18 淡青灰色シルト層 (0.1mm以下のシルトで構成される)</p> |
|--|--|

図 24 溝 1 アゼ (1/20)

表 5 土層対応表

図20	図21	図22・23	層名
1	1	1	耕作土
2	2	2	床土
3			床土
4			図20の8と同じだがやや暗い
5			淡黄色土 (5mm以下の砂礫で構成される)
6			黄褐色粘土混じり土 (5mm以下の砂礫で構成され、炭、単離灰色シルトブロックを含む)
7			淡灰褐色土 (7mm以下の砂礫で構成され、土器片、炭含む)
8			図20の5と同色でやや明るい
9			図20の8と同じだがやや黄色が強い
10	41	6	淡灰色土 (2mm以下の砂礫で構成される)
11			淡灰褐色土
12			黄灰褐色土 (4mm以下の砂礫で構成される)
13			淡灰褐色土 (1mm以下の砂礫で構成されやや粘質)
14			浅黄灰色シルト層 (1mm以下の砂礫で構成される)
15			図20の14と同色で0.5mm以下の砂礫で構成される
16			淡灰褐色土 (5mmの砂礫で構成される)
17			図20の7に比べ黄褐色のブロックのため、暗い
18	2	3	灰褐色土 (上層) (2mm以下の砂礫で構成され、1mm大の礫を多量に含む)
19			灰褐色土 (下層) (4mm以下の砂礫で構成される。黄褐色粘土を多く含む)
20			図20の27と同じで若干礫が多い
21			図20の25と同色で炭を多く含む
22			図20の25と同色で4cm大の砂を含む
23			図20の25と同色で4cm大の砂を含む
24			黄灰色砂礫層 (0.3mm以下の砂礫で構成され、やや汚い感じ)
25			黄褐色砂礫層 (2mm以下の砂礫で構成され、炭を含む)
26			図20の24と同色で若干淡黄灰色シルトが混じる
27			淡灰色土 (0.2mm以下の砂礫で構成され、ややシルト質、黄褐色土ブロックを含む)
28			淡黄褐色土 (1mm以下の砂礫で構成される。ベース)
図20	図21	図22・23	層名
29			灰褐色土 (1mm以下の砂礫で構成される)
30			暗灰色粘質土 (0.1mm以下の粗砂で構成され、5cm大の礫、土器片を多量に含む)
31			図20の30と同色で粘土のみ
32			図20の16と同色で黄褐色土ブロックが入る
33			図20の12と同色だがやや黄色が強い
34			黄灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成される)
35			淡黄褐色土 (0.5mm以下の砂礫で構成される)
36			黄褐色粘質土 (0.5mm以下の砂礫で構成される 明橙色粘土灰褐色粘ブロックが混じる炭含む)
37			黄褐色礫混土 (7mm以下の砂礫で構成される 淡黄灰シルトを若干含む)
38			淡灰褐色砂礫層 (2mm以下の砂礫で構成される)
39			灰褐色粗砂混土 (3mm以下の砂礫で構成される)
40			図20の38と同色でやや粘土混じり
41			黄褐色粘質土 (1cm以下の砂礫で構成される 炭含む)
42			図20の6と同じで7mm大の礫が多い
43			黄褐色粗砂層 (3mm以下の砂礫で構成され、灰白粘どブロック含む)
44			黄褐色土 (5mm以下の砂礫で構成され淡黄灰色シルトブロックと炭含む)
45			黄褐色土 (3mm以下の砂礫で構成される)
46			淡黄褐色土 (3mm以下の砂礫で構成される)
47			暗灰褐色粗砂層 (5mm以下の砂礫で構成される)
48			暗黄褐色混土粗砂層 (5mm以下の砂礫で構成され、灰を多量に含む)
49			淡灰褐色土 (1cm以下の砂礫で構成される)
50			淡黄褐色シルト層 (0.5mm以下の砂礫で構成される)
51			灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成される)
52			黄褐色礫混土 (2mm以下の砂礫で構成される)
	3		青黄灰褐色シルト (赤粘粒、土器片含む、0.5mm以下の砂礫で構成される)
	4	4	淡黄灰色土 (2mm以下の砂礫で構成される)
	5	12	灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成され、2cm大の石と、土器片含む)

図20	図21	図22・23	層名
	6		淡黄褐色土 (1mm以下の砂礫で構成され、2cm以下の石を含む)
	7		図21の10と同じで土器片を含む
	8		灰褐色礫混土 (5mm以下の砂礫を含む)
	9		灰褐色砂礫層 (2mm以下の砂礫で構成される)
	10		灰褐色礫混土 (6mm以下の砂礫を含む) 71より暗い
	11		淡灰色シルト層 (3mm以下の砂礫で構成され、4cm大の石と土器片含む)
	12		図20の3に同じ淡黄灰色シルト層 (1mm以下の砂礫で構成され、暗灰褐色、黄灰褐色シルトブロックを含む)
	13		青黄灰褐色シルト (やや黄色が強い)
	14		淡灰色砂礫層 (3mm以下の砂礫で構成される)
	15		青黄灰褐色シルト (5mm以下の砂礫で構成される)
	16		淡黄褐色シルト (1mm以下の砂礫で構成される)
	17		淡灰色砂混土 (5mm以下の砂礫を含む)
	18		暗灰褐色粘質土 (1mm以下の砂礫で構成され、赤橙粒1cm大の石を含む)
	19		淡灰褐色砂礫層 (5mm以下の砂礫で構成される)
	20		灰褐色シルト (2mm以下の砂礫で構成され、黄灰褐色シルトブロックを多量に含み、土器片も含む)
	21		灰褐色粗砂混土 (2mm以下の砂礫で構成され、土器片含む)
	22		暗灰褐色粘質土 (1mm以下の砂礫で構成され、7mm大の礫を多量に含み土器片を含む)
	23		灰色砂礫層 (5mm以下の砂礫で構成される)
	24		淡灰褐色混土粗砂層 (1mm以下の砂礫で構成され、暗灰褐色、黄灰褐色シルトブロックを含む)
	25		灰褐色土 (3mm階の砂礫で構成され、2cm大の礫を含む)
	26		浅黄灰色シルト層 (0.1mm以下の砂礫で構成される)
	27		暗灰褐色粘質土 (5mm以下の砂礫を含む)
	28		暗灰褐色粘質土 (1mm以下の砂礫で構成される)
	29		図21の22と同じ色 (硬質で強粘)

図20	図21	図22・23	層名
	30		暗灰褐色粗砂層 (1mm以下の砂礫で構成され、3mm大の礫を多量に含む)
	31		暗灰褐色粗砂層 (黄灰色で黄褐色シルトブロックを含む)
	32		浅黄灰色シルト層 (0.5mm以下の砂礫で構成される)
	33		淡青灰色粘質土 (0.1mm以下の砂粒で構成される)
	34		淡灰色砂礫層 (5mm以下の砂礫で構成され、淡灰褐色粘土ブロック含む)
	35		淡灰色砂礫層 (2mm以下の砂礫で構成される)
	36		淡灰色シルト層 (0.5mm以下の砂礫で構成される4mm大の礫を多量に含む)
	37		淡黄灰色シルト層 (2mm以下の砂礫で構成される)
	38		図21の19と同じ色 (弱粘)
	39	21	灰褐色土 (上層) (1mm以下の砂礫で構成され、1cm大の礫を若干含む)
	40		灰褐色土 (上層) (4mmの砂礫で構成される土器片含む)
	42		図20の40より灰色が強い
	43		灰褐色土 (下層) (4mm以下の砂礫で構成される)
	44		淡灰色シルト (1mm以下の砂礫で構成される)
	45	66	灰褐色土 (下層) (黄褐色シルトを若干含む)
		5	淡黄灰色土 (1mm以下の砂礫で構成される焼土)
		7	淡黄灰色土 (4mm以下の砂礫で構成されている)
		8	淡黄灰色土 (図22の5より明るい)
		9	淡灰色土 (1mm以下の砂礫で構成され、焼土を含む)
		10	淡灰色土
		11	淡灰色土 (やや褐色が混じる)
		13	淡灰色土 (5mm以下の砂礫で構成される)
		14	淡灰色土 (1mm以下の砂礫で構成される)
		15	淡灰色土 (1mm以下の砂礫で構成され、密)
		16	淡黄灰色土 (2mm以下の砂礫で構成され土器片若干含む)
		17	淡黄灰色土 (3mm以下の砂礫で構成され炭を含む)
		18	淡黄灰色土 (酸化鉄が多い)
		19	淡灰色土 (2mm以下の砂礫で構成される)

図20	図21	図22・23	層名
		20	淡黄灰色土 (1mm以下の砂礫で構成される蛭土) 図22の6より褐色系
		22	淡灰色土 (5mm以下の砂礫で構成される)
		23	灰褐色土 (5mm以下の砂礫で構成される)
		24	灰褐色土 下層
		25	淡灰色土 (図22の28より黄色系)
		26	灰色シルト土 (0.5mm以下の砂礫で構成される)
		27	淡灰色シルト (1mm以下の砂礫で構成される)
		28	淡灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成される)
		29	淡黄灰色土 (図22の6より褐色強い)
		30	黄灰色土 (3mm以下の砂礫で構成される)
		31	淡黄灰色土 (3mm以下の砂礫で構成される)
		32	黄灰色土 (4mm以下の砂礫を含む) (黄褐色強い)
		33	淡黄灰色土
		34	淡灰色土
		35	淡褐色土 (2mm以下の砂礫で構成され赤粒粒を含む)
		36	灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成され蛭土含む)
		37	灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成され、1cm以下の砂礫含む)
		38	灰褐色土 (4mm以下の砂礫で構成され、礫が若干多い)
		39	灰褐色土 (1mm以下の砂礫で構成され、土器片含む)
		40	黄灰褐色土 (4mm以下の砂礫で構成され、蛭土含む)
		41	淡黄灰色土 (2mm以下の砂礫で構成され蛭土、土器片を含む)
		42	淡灰褐色土 (1mm以下の砂礫で構成され、土器片、蛭土含む)
		43	灰褐色土 (上層) (2mm以下の砂礫で構成され、土器片含む)
		44	灰褐色土 (上層) (4mm以下の砂礫で構成され、土器片を含む)
		45	淡灰褐色土 (1mm以下の砂礫で構成される)
		46	灰褐色土 (1mm以下の砂礫で構成され、灰色粘土ブロックを若干含む)
		47	灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成される)
		48	灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成される)

2
か

図20	図21	図22・23	層名
		49	淡褐色土下層 (5mm以下の砂礫で構成され、土器片を含む)
		50	淡灰褐色シルト (3mm以下の砂礫で構成され、1mm大の砂礫若干含む)
		51	灰褐色粘質土 (0.5mm以下の砂礫で構成され、弱粘)
		52	灰褐色粘質土 (0.5mm以下の砂礫で構成され、やや弱粘)
		53	灰褐色土 (下層) (2細形以下の砂礫で構成され土器片含む)
		54	淡灰色砂礫層 (3mm以下の砂礫で構成され、土器片含む)
		55	淡灰褐色砂礫層 (2mm以下の砂礫で構成され、土器片を含む)
		56	灰褐色土上層 (2mm以下の砂礫で構成され、土器片含む)
		57	灰褐色土 (2mm以下の砂礫で構成され、土器片含む)
		58	灰褐色土 (3-2mm以下の砂礫で構成され、焼土、土器含む)
		59	灰褐色 (下層) (1mm以下の砂礫で構成され、土器片含む)
		60	淡灰色シルト (0.5mm以下の砂礫で構成される)
		61	浅黄褐色シルト (1mm以下の砂礫で構成される)
		62	淡灰色シルト (0.1mm以下の砂粒で構成される)
		63	淡灰褐色シルト層 (1mm以下の砂礫で構成され、黄褐色土ブロックを含む)
		64	淡灰色シルト (1mm以下の砂礫で構成される)
		65	淡黄褐色シルト層 (1mm以下の砂礫で構成される)

第5節 纏向遺跡第99次調査

1. はじめに

纏向遺跡第99次調査は大字大豆越字灯笼田107番1で個人住宅の建設に伴う範囲確認調査としておこなった。調査地は纏向遺跡の北縁、天理市との市境付近にあたる。調査地の周辺では東約20mで第38次調査7トレンチ¹⁾が行われているものの比較的調査の少ない地域である。調査期間は平成9年8月5日から8月22日で、調査面積は東西5m、南北15mのトレンチを設定し75㎡である。

なお本調査は既に概報が報告されているが²⁾、土層の堆積状況や出土遺物など未報告の部分も多かったため改めて報告するものである。

2. 基本層序と地形

調査地は纏向川河道1の流路内にあたる(図2)。基本層序は、現代の盛土、暗灰色土(旧水田)、褐色土(床土)、灰褐色土、灰色シルト、旧河道堆積層となる。灰色シルト上面で遺構検出を行い東西方向の溝を3条検出している。その下層では旧河道を検出した。旧河道は検出面から0.6m掘り下げたものの、それ以上の掘り下げは断念した。河道からは多量の土器のほか、銅鏃、木鏃、土錘が出土した。



図25 纏向遺跡第99次調査地の位置 (1/3000)

3. 遺構 (図26)

概報の記述では3条の東西溝を検出しているが、平面図、断面図上には以下の2つの溝のみ図示されている。SD02の所在は明らかでないが、灰色シルト層上面で遺構検出していることから考えて、4層のなかでもSD01よりも南側に広がる浅い堆積がSD02にあたる可能性がある。いずれの遺構も遺物は僅少である。後述する須恵器壺(43)からSD01は古墳時代後期以降であろう。いずれも旧河道埋土が堆積したのちに形成されたものである。SD01は幅約2.8m、深さ約0.3m、長さ5m以上の東西溝である。SD03は幅約0.4m、深さ約0.1m、長さ5m以上の東西溝である。

4. 遺物 (図27～29)

コンテナ10箱分、重さ66105gの遺物が出土している。そのほとんどが土器で、59940gが旧河道より出土している。1～41は旧河道出土と、旧河道出土の蓋然性の高い遺物である³⁾。完形に復元できるものは少ないが大ぶりの破片が多い。1-3、5・6、8-10は布留形甕。口縁部が強く肥厚する個体は少なく、また薄手の個体が多い。4は体部外面をハケ調整する。14、15、23、24のような直口壺も多い。また外来系の土器も目立つ。吉備系(7)、山陰系(11、16、22、30)、東海系(12)、近江系(13、38)、阿波系(18)、讃岐系(21)、北陸系(37)、系譜不明(17)を抽出した。そのほとんどが胎土から見て外部から持ち込まれた可能性が高い。31も外来系土器では手焙り形土器とも考えられるが全体器形がわからない。体部に波状文を施し外来の胎土である。

29は小型丸底鉢である。外面をハケ調整し全体に白色で三好玄による分類のⅡ群に相当する⁴⁾。32は大型鉢とみられるが、口径復元に不安が残る。19・20は外面を粗いハケ調整する壺。35は高坏で内外面に漆とみられる被膜の付着が認められる。36はミニチュア鉢、39は深鉢で、縄文時代晩期の所産であろう。40は凹基式有茎の銅鏃である。茎の断面は菱形をなす。鋳バリの可能性がある。41は断面円形の木鏃である。先端は三角錘状になる。茎も斜めにカットされている。材質はモミ属製⁵⁾。43はSD01出土の須恵器壺。三角形スカシが三か所あり古墳時代後期の所産と考える。

5. まとめ

第99次調査の全域は古墳時代前期には流路であることが明らかとなった。流路から出土した土器には多様な外来系土器が認められる。庄内形甕や弥生形甕は少なく布留形甕が多いこと、布留形甕の口縁部形状、小型丸底鉢の形態、器種構成からみて土器群は布留1式期に時期的な中心がおける。流路の埋没時期も布留1式期か、それから間もない頃とみるべきであろう。

【注記】

- 1) 関川尚功・松永博明1984「纏向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1983年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 2) 岩崎大介1998「纏向遺跡第99次調査報告」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集 平成9年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 3) 出土日時から考えて旧河道を調査している頃の取り上げであることと、遺物の内容から判断した。個々の遺物出土状況は

表6参照

- 4) 三好玄2007「小型丸底土器における製作技術の二系統」『考古学に学ぶ 森浩一先生傘寿記念献呈論集』
- 5) 橋本輝彦1997「桜井市域出土の木鏃・銅鏃について」『平成8年度国庫補助事業による発掘調査報告書 桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集』

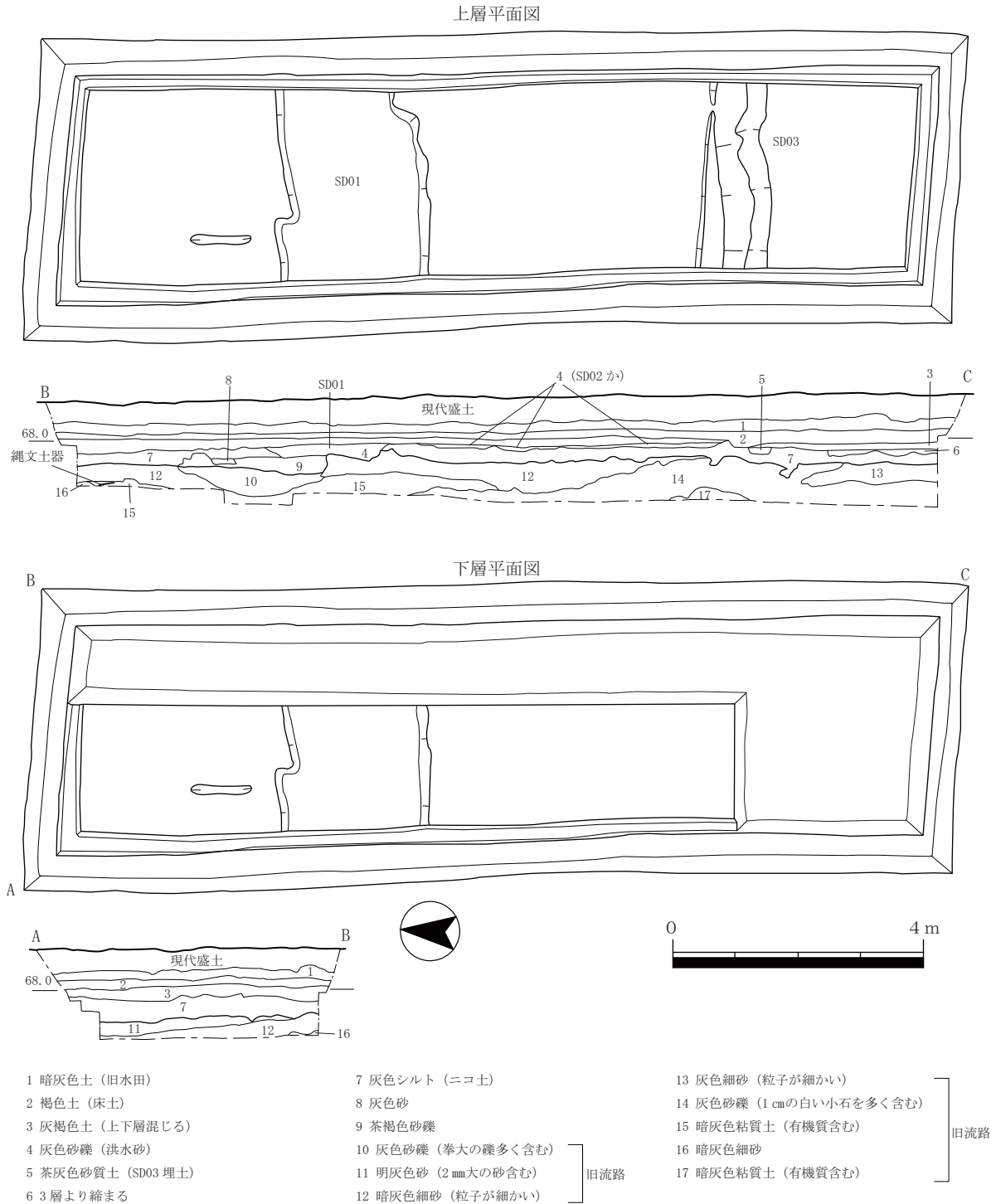


図26 纏向遺跡第99次調査平面・断面図 (1/100)

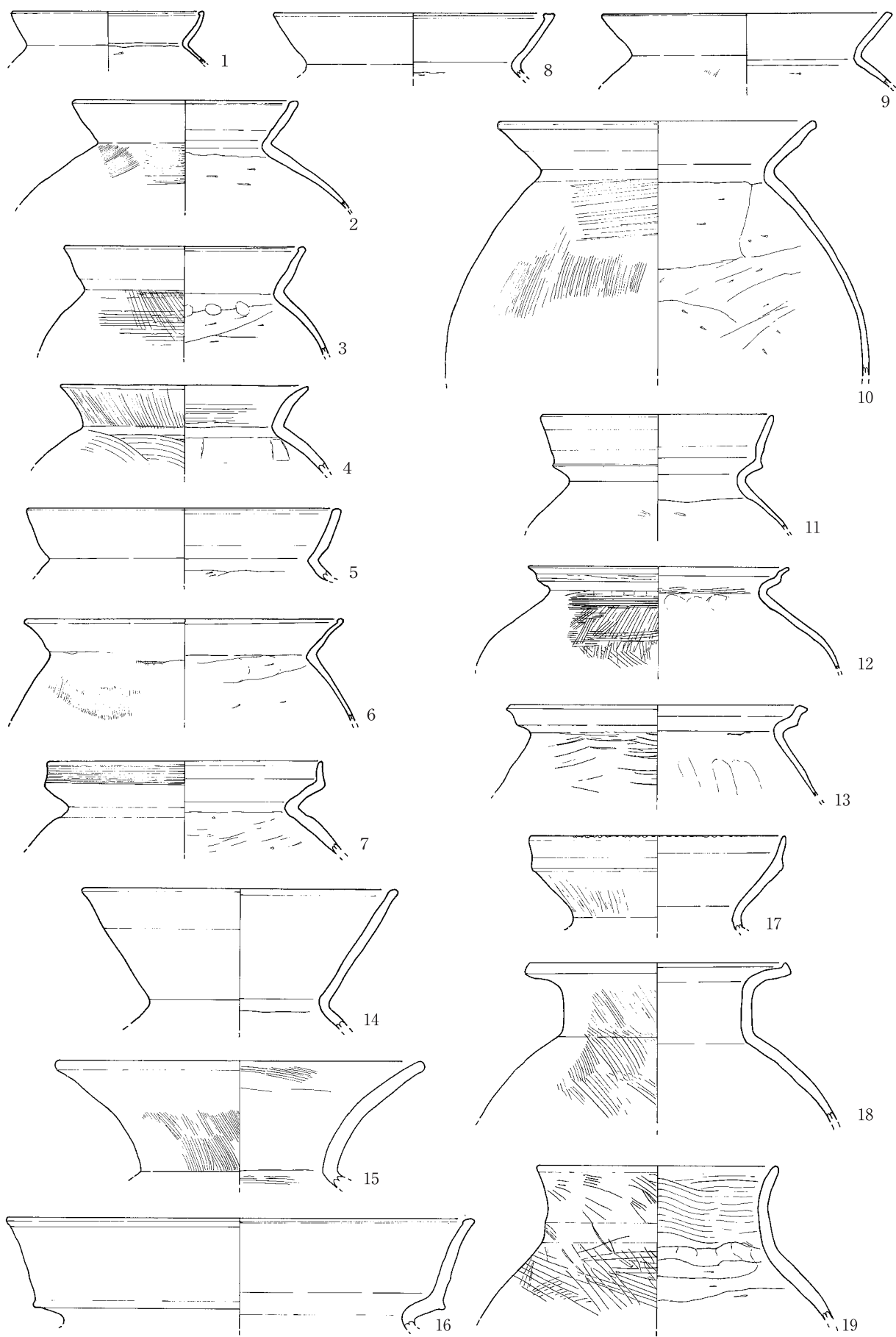


图27 纏向遺跡第99次調査出土遺物 1 (1/3)

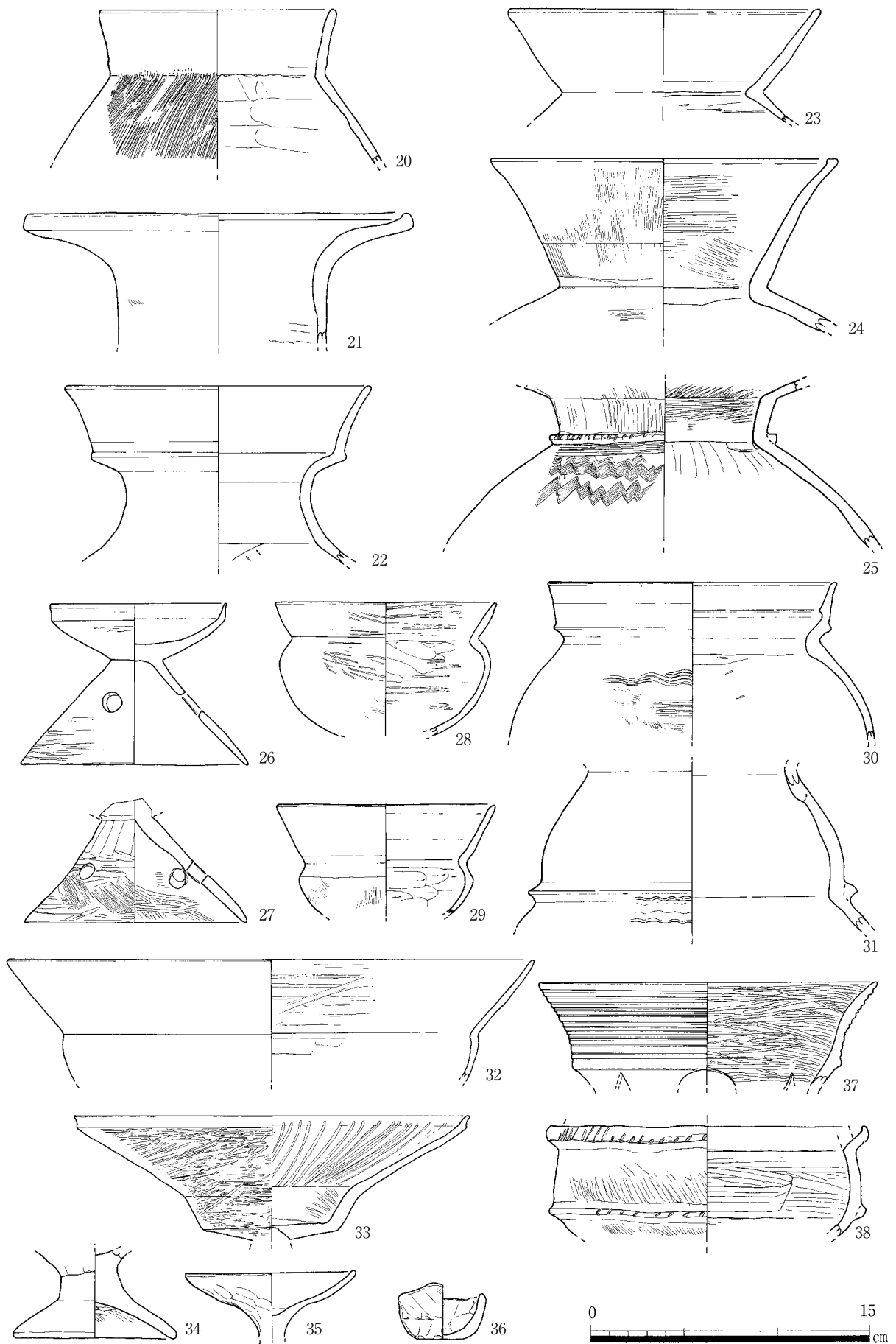


图28 纒向遺跡第99次調査出土遺物 2 (1/3)

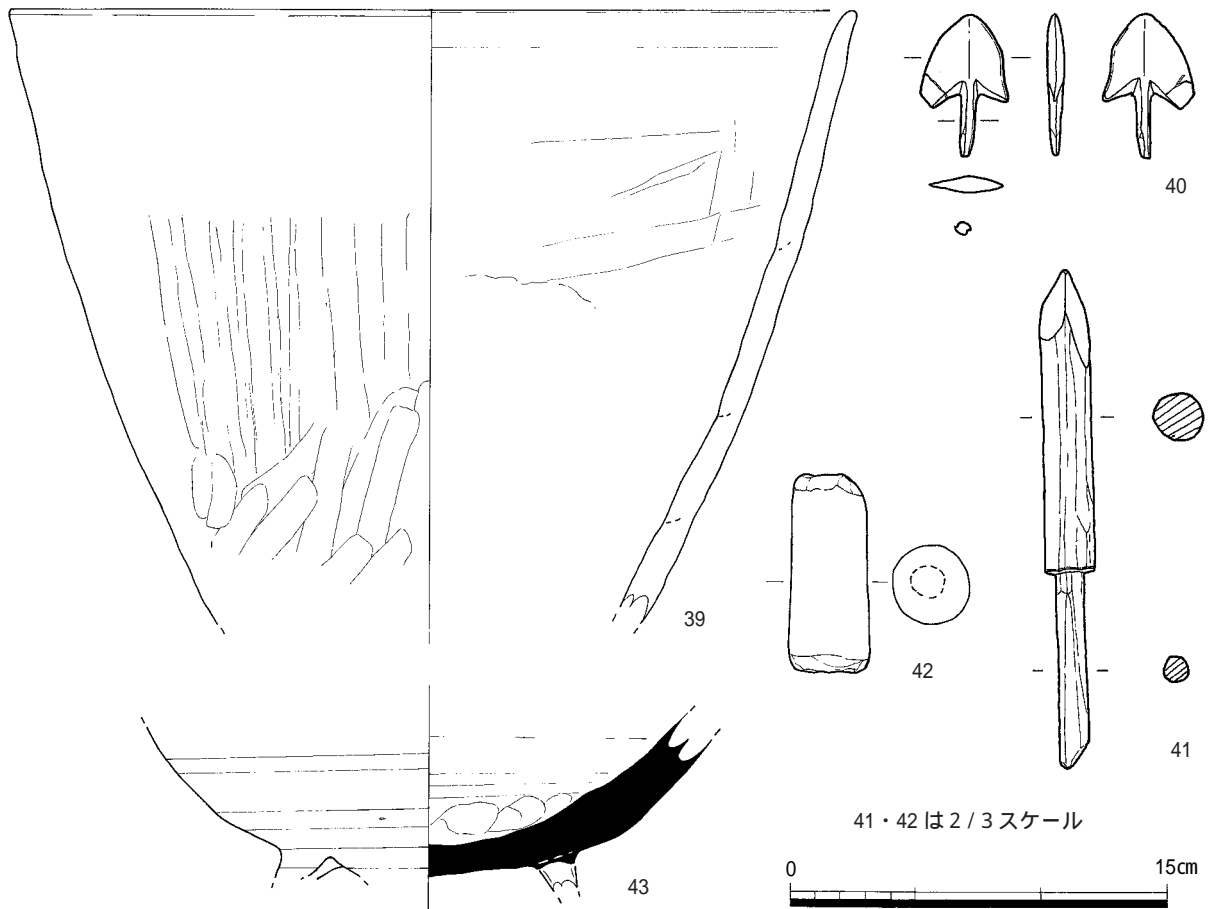


図29 纏向遺跡第99次調査出土遺物 3 (1/3)

表6 遺物観察表

報告 No.	地区 層位	器種・形式	細別形式等	法量 (復元) cm	調整	色調	備考
1	旧河道 排水溝	布留形甕	口縁g1	口径10.4	外面：ススのため不明 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外10YR8/4浅黄橙 内7.5YR8/6浅黄橙 断7.5YR5/1褐灰	
2	旧河道 排水溝	布留形甕	口縁g1	口径11.9	外面：口縁部ナデ、体部ヨコハケ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外5YR6/6橙 内7.5YR7/4にぶい橙 断7.5YR5/1褐灰	
3	排水溝 旧河道	布留形甕	口縁g1	口径13.0	外面：口縁部ナデ、体部ヨコハケ・タテ ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外7.5YR5/4にぶい褐 内7.5YR6/4にぶい橙 断7.5YR6/4にぶい橙	
4	旧河道 排水溝	甕		口径13.6	外面：口縁部タテハケ、体部ヨコハケ 内面：口縁部・体部板ナデ	外7.5YR7/6橙 内7.5YR7/6橙 断7.5YR7/6橙	系譜不明
5	旧河道 排水溝	布留形甕	口縁h	口径17.0	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外7.5YR7/4にぶい橙 内5YR6/8橙 断7.5YR6/1褐灰	口径不安
6	旧河道 排水溝	布留形甕	口縁e2	口径17.7	外面：口縁部ナデ、体部タテハケ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外10YR7/4にぶい黄橙 内10YR6/2灰黄橙 断10YR5/1灰褐	
7	旧河道	吉備系甕		口径14.8	外面：ハケ 内面：ケズリ	外内断	口径不安
8	旧河道	布留形甕	口縁g2	口径15.0	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外7.5YR8/3浅黄橙 内7.5YR8/4浅黄橙 断7.5YR8/4浅黄橙	口径不安
9	旧河道	布留形甕	口縁h	口径15.6	外面：口縁部ナデ、体部タテハケ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外7.5YR7/4にぶい橙 内7.5YR8/4浅黄橙 断7.5YR8/3浅黄橙	口径不安
10	旧河道	布留形甕	口縁h	口径17.0	外面：口縁部ナデ、体部上半ヨコナデな いしヨコハケ、下半タテハケ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外7.5YR8/6浅黄橙 内7.5YR7/4にぶい橙 断7.5YR7/4にぶい橙	あまり肩がはらない 外面体部にスス 口径不安
11	旧河道	山陰系甕		口径12.4	外面：ナデ内面：ケズリ	外5YR7/4にぶい橙 内5YR8/4淡橙-5YR7/6橙 断10YR8/2灰白	白い外来の胎土 外面頸部にスス
12	旧河道	S字甕C類		口径14.0	外面：口縁部ナデ、体部ヨコハケ・タテ ハケ内面：ナデ・ユビオサエ、頸部ハケ メ	外10YR8/2灰白 内7.5YR7/2明褐色- 10YR7/2にぶい黄橙 断10YR5/1褐灰	口径不安
13	旧河道	近江系甕		口径15.8	外面：口縁ナデ体部ヨコハケ 内面：ナデ	外N2/黒-2.5Y8/2灰白 内2.5Y8/2灰白- 10YR4/4褐 断N3/暗灰	口径不安 外面スス 外来の胎土
14	旧河道 排水溝	短頸直口壺C		口径17.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外7.5YR7/4にぶい橙- 7/8橙 内7.5YR7/6橙 断7.5YR6/1褐灰	
15	旧河道 下層砂利	広口壺Bか		口径19.6	外面：タテハケ 内面：口縁部ハケメ、頸部ハケメ	外5YR7/4にぶい橙 内7.5YR6/2灰褐 断7.5YR6/1褐灰	
16	旧河道	山陰系壺		口径25.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外2.5Y8/1灰白-7./1灰白 内10YR7/2にぶい黄橙 断10YR8/2灰白	口径不安 白い外来の胎土
17		二重口縁壺		口径13.8	外面：口縁部ナデ、刻み 頸部タテミガ キ 内面：ナデ	外10YR8/2灰白 黒斑10YR4/1褐灰 内10YR7/2にぶい黄橙 黒斑10YR3/1黒褐 断10YR7/1灰白	外来の胎土
18	旧河道 排水溝	阿波系壺		口径14.0	外面：タテハケ 内面：口縁部ナデ、体部ユビオサエ	外7.5YR7/6橙 内2.5YR7/6橙 断7.5YR4/1褐灰	外来の胎土 外面のハケメは下の単位から 上の単位へ進んでいるように 見える
19	旧河道 排水溝	壺	広口壺Dか	口径12.8	外面：口縁部ハケメ→ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコハケ、体部ケズリ	外7.5R7/4にぶい橙 内7.5YR7/3にぶい橙 断Hue4/0灰	クサリレキ多い外来の胎土
20	旧河道	短頸壺A2		口径12.6	外面：口縁部ナデ、体部タテハケ 内面：ナデ	外2.5Y8/3淡黄 内2.5Y7/2灰黄 断N4/灰	

21	旧河道	阿波系壺		口径20.6	外面：ナデ内面：ナデ	外10YR6/2灰黄褐 内7.5YR8/6浅黄橙 断N7/灰白	外来の胎土
22		二重口縁壺		口径18.3	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外7.5YR8/2灰白 内10YR8/3浅黄橙 断10YR7/1灰白	山陰系 口径不安 外来の胎土
23	旧河道	直口壺		口径15.0	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外7.5YR7/4にぶい橙 内7.5YR7/4にぶい橙 断10YR5/1褐灰	
24	旧河道	直口壺		口径18.6	外面：口縁部タテハケ、体部ヨコハケ 内面：口縁部ヨコハケ、体部ケズリ	外7.5YR8/3浅黄橙 内7.5YR8/2灰白 断10YR7/1灰白	外面に沈線
25	旧河道 排水溝	二重口縁壺		頸径12.1	外面：口縁部タテミガキ、体部直線文・ 波状文2条 内面：口縁部ヨコミガキ、体部ユビオサエ	2.5YR6/6橙 5YR7/4明褐色 5YR4/2褐灰	体部文様施文具は8条以上の 櫛歯工具
26	排水溝 旧河道	小型器台	II C 4	口径9.5 脚径12.4 器高8.7	外面：ヨコミガキ 内面：マメツ	外7.5YR7/3にぶい橙- 2.5YR5/6明赤褐 内7.5YR7/4にぶい橙 断2.5YR6/8橙	3方スカシ
27	排水溝 旧河道	小型器台	II	底径12.0	外面：上部ケズリ、裾部ハケメ→ミガキ 内面：ハケメ	外5YR7/4にぶい橙-7/6橙 内5YR7/4にぶい橙 断5YR8/3淡橙	3方スカシ
28	旧河道 下層砂利	小型丸底鉢	II A 1	口径11.9	外面：ミガキ内面：ミガキ	外5YR5/3にぶい赤褐 内7.5YR5/2灰褐 断7.5YR5/1褐灰	外面スス付着
29	旧河道 下層砂利	小型丸底鉢	II B 1	口径11.7	外面：口縁部ナデ、体部タテハケ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外10YR7/3にぶい黄橙 内10YR7/3にぶい橙 断7.5YR7/4にぶい橙	三好分類II群
30		山陰系甕		口径15.4	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ→波状文 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	外10YR8/2灰白 内10YR8/2灰白 断10YR8/2灰白	口径不安白い外来の胎土
31		鉢?		口径	外面：マメツ、波状文内面：マメツ	外7.5YR7/2明褐色 内10YR7/2にぶい黄橙 断10YR8/3浅黄橙	器形不明外来の胎土
32	旧河道 下層砂利	大型鉢		口径28.3	外面：マメツ 内面：口縁部板ナデ	外7.5YR7/6橙 内7.5YR5/1褐灰 断2.5Y7/1灰白	口径不安
33	旧河道 排水溝	有段口縁高坏	高坏H	口径21.3	外面：ヨコミガキ 内面：ヨコナデ→放射ミガキ	外2.5YR7/8橙 内2.5YR5/1赤灰 断2.5YR6/1赤灰	内外にスガつく
34	旧河道 排水溝	高坏		底径8.6	外面：ハケメ、ナデ 内面：ハケメ	外10YR6/4にぶい黄橙- 6/6明黄褐 内7.5YR5/3にぶい褐 断10YR6/3にぶい黄褐	スカシなし 茶色い外来の胎土
35	旧河道	高坏		口径9.2	外面：ユビオサエ 内面：マメツ	外10YR8/3浅黄橙 内10YR8/2灰白 うるし 10YR3/1黒褐 断10YR4/1褐灰	内外面にウルシ付着
36	旧河道 排水溝東側	ミニチュア土器		口径4.4	外面：ユビオサエ 内面：ユビオサエ	外10YR7/3にぶい黄橙 内10YR7/3にぶい黄橙 断	外面黒斑
37	旧河道	北陸系裝飾器台		口径18.4	外面：擬凹線 内面：ヨコミガキ	外淡赤褐色 内淡赤褐色 断	外来の胎土 石川県梯川上流 域か外面赤彩 注2より転載
38	旧河道	手焙り形土器		口径	外面：タテハケ、刻み 内面：板ナデ、ハケメ	外10YR7/1灰白- 10YR7/2にぶい黄橙 内10YR5/1褐灰 断10YR7/2にぶい黄橙	外来の胎土
39	トレンチ 北側旧河道 暗灰色粘土	深鉢		口径30.4	外面：ナデ 内面：板ナデ	外10YR6/3にぶい黄橙- 10YR5/2灰黄褐、 10YR5/1褐灰 内10Yr2/1黒 断10Yr4/1褐灰	縄文時代晩期か外面上部は被 熱剥落著しい口径不安 東壁 断面図に示されている個体か
40	旧河道	銅鏝	凹基式有茎	全長2.9cm 身部の長さ1.25cm 茎部の長さ1.65cm 身部の厚さ3.5mm 茎断面径2.5mm 重量3.05g			茎に鑄バリが認められ鑄放し の可能性がある 注4より転載
41	旧河道内	木鏝		全長10cm 身径1cm 茎径0.5cm			断面円形 切先三角錐状材 質：モミ属製 注4より転載
42	旧河道	土錘		全長7.8cm 重量79g	ナデ		
43	SD01上 層褐色砂礫	須恵器壺		口径	内面：体部ナデ、底部オサエ 外面：体部回転ヘラケズリ	外N6/0灰 内N7/0灰 断N7/0灰	ロク右回転か3方3角透かし

第6節 纏向遺跡第101次調査

1. はじめに

纏向遺跡第101次調査は大字穴師322番で個人住宅の改築に伴う事前調査として行った。調査地は纏向遺跡の北部、穴師集落の内部にあたる。この周辺は比較的既往の調査が少なく西約70mで第74次調査¹⁾が行われている程度である。この調査はすでに概要が報告されているが²⁾、土層の情報が記載されていないので改めて報告するものである。調査は平成9年11月25日から12月5日にかけて行った。調査面積は12㎡である。

2. 基本層序と地形

調査区北側には珠城山古墳群が展開する珠城山丘陵が東西に延びている。その南斜面は急傾斜となって纏向川河道1（図2）を形成しており、調査区は河道に収まる。

概報によると、調査区は東西に長い6m×2mのトレンチを設定した。基本層序は盛土、1層褐灰土、2層灰色粘砂（近世土器含）、5層黒褐色粘質土、6層青灰色シルト、10層灰色砂礫となる。2層上面で木桶を検出し、5層上面で東西方向の暗渠を検出した。2層から縄文土器、弥生土器、古式土師器が出土した。10層は河原石が多く旧河道であったと思われる。現地表から旧流路まで約1mである。

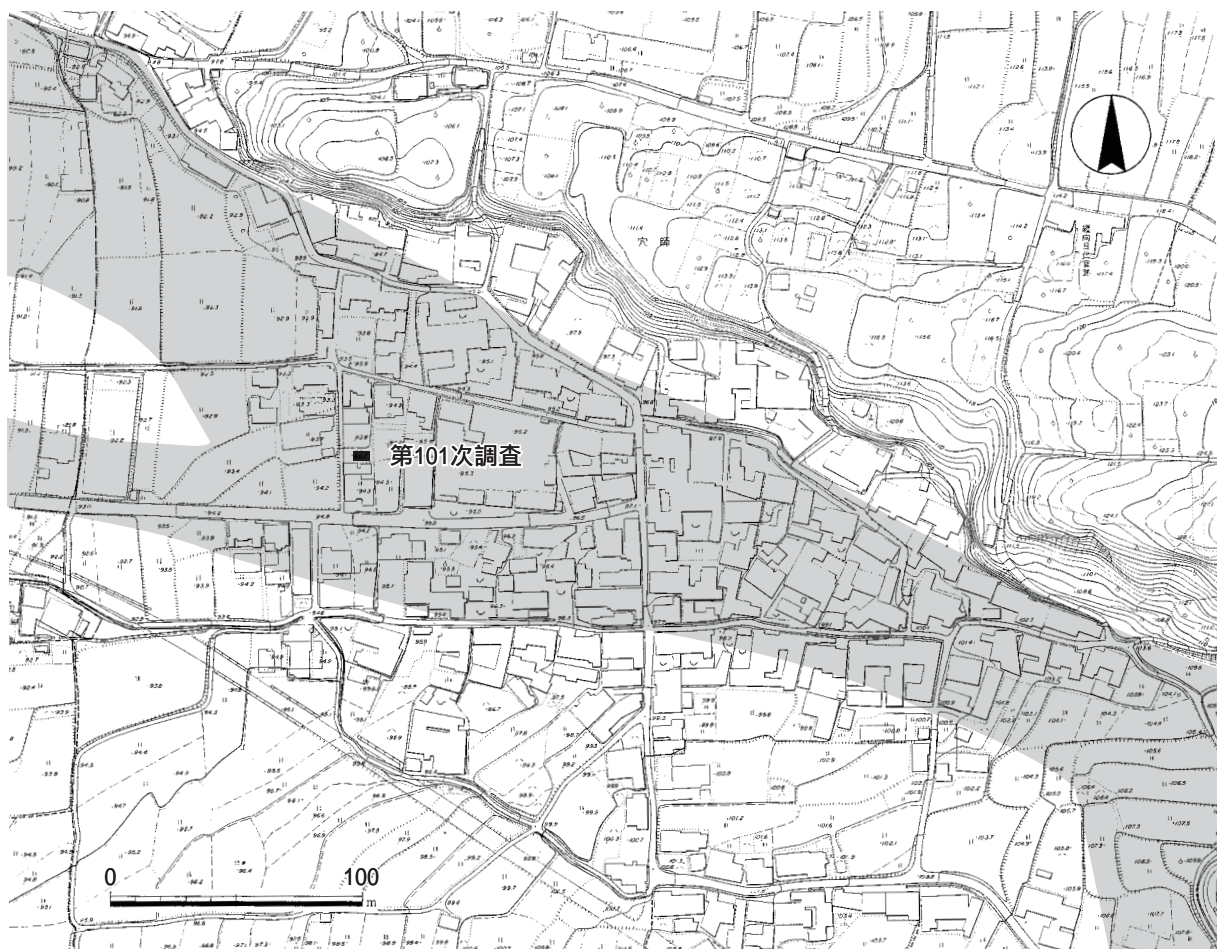


図30 纏向遺跡第101次調査地の位置（1/3000）

3. 遺構 (図31)

遺構は5層上面で検出した暗渠がある。幅約0.4m、下部に拳大の石を置き、上部に人頭大の石を置き、さらに青灰色砂質土で埋め戻す。暗渠内部には黒褐色粘質土層がある。暗渠下底面レベルは東西端ともに92.85m前後でほぼ水平である。地形から見ても西に水を流していたものと考えられる。暗渠内部に残された遺物から、近世以降の所産である。

4. 遺物 (図32)

全体で約10550gの遺物が出土した。その大半は小片で、縄文土器、弥生土器、古式土師器、陶磁器、瓦片、近代以降の木桶、柄鏡、桃核がある。量的には古式土師器が卓越する。本報告書を作成するにあたり再度点検したが、木桶は確認できなかった。

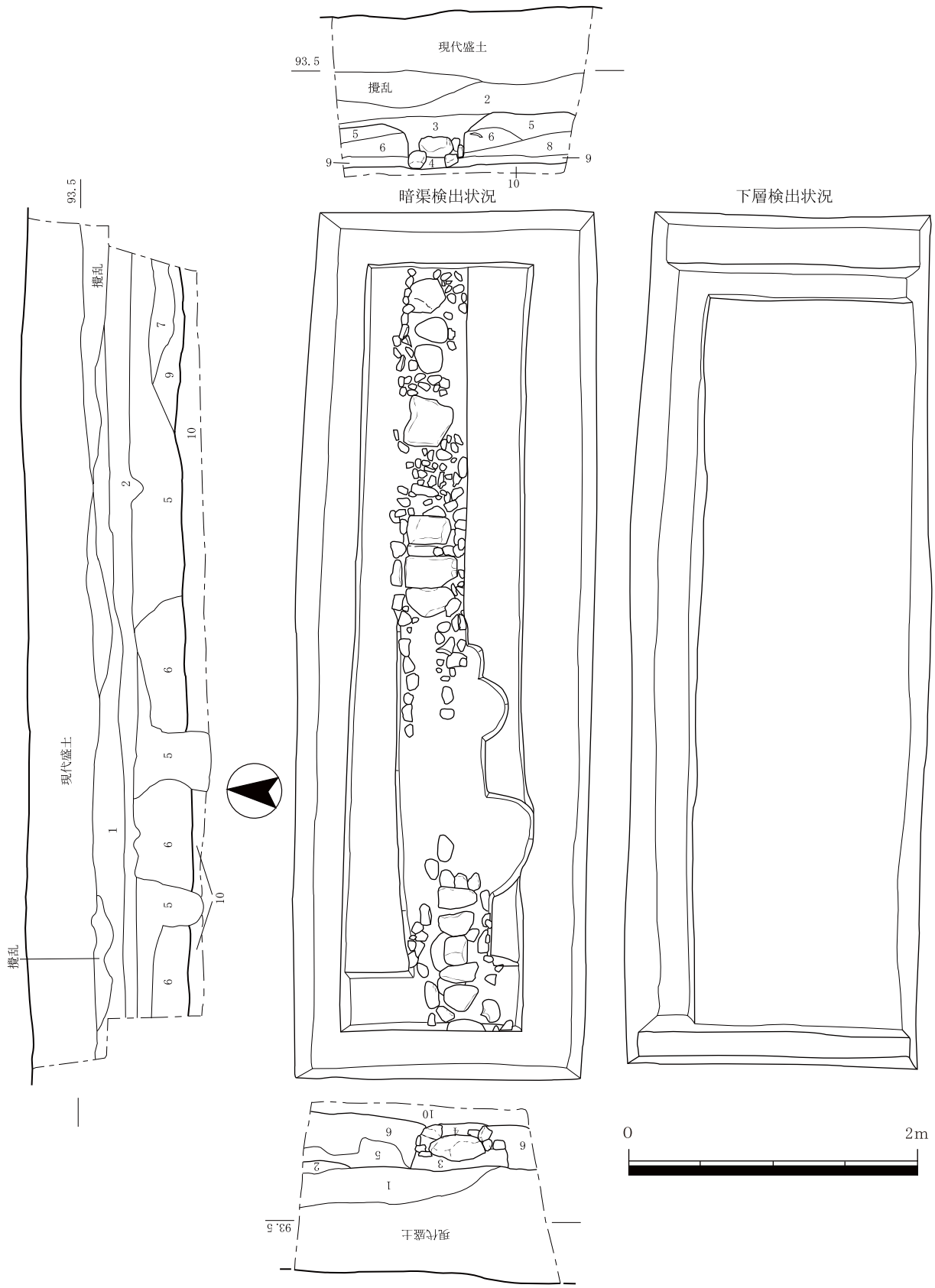
2層より布留形甕口縁部、吉備系甕の口縁部や山陰系鼓形器台、縄文土器、口唇部に刻目のあるミガキを施した広口壺などが出土している。盛土出土の柄鏡は柄を欠損するがほかは完形で、径13.7cm、縁の高さ0.3cm、厚さ0.2cm、重さ191.7gをはかる。「天下一藤原作」の銘があり、近世の所産である。10層から出土した遺物はない。

5. まとめ

本調査では古墳時代にさかのぼるような遺構は確認できず調査区全体が旧河道内部と推定できる。一方で第74次調査では遺構も検出していることや、古式土師器が多く出土することから、周辺に遺構が残存する箇所がある可能性もあり、今後も継続した調査が必要である。

【注記】

- 1) 清水眞一1994『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集 桜井市 纏向遺跡第74次・76次発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 2) 岩崎大介1998「纏向遺跡第101次調査」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集 平成9年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書』桜井市教育委員会



- | | |
|-------------------------|------------------|
| 1 褐色土 (旧水田か?) | 6 青灰色シルト質 |
| 2 灰色粘砂 (粒子が細かい、近世土器を含む) | 7 黒褐色土 (やや粘性がある) |
| 3 青灰色砂質土 (暗渠内堆積土) | 8 黒褐色粘砂 |
| 4 黒褐色粘質土 (暗渠埋め戻し土) | 9 黒褐色粘砂 (砂粒を含む) |
| 5 黒褐色粘質土 | 10 灰色砂礫 (河川堆積) |

図31 纏向遺跡第101次調査平面・断面図 (1/40)

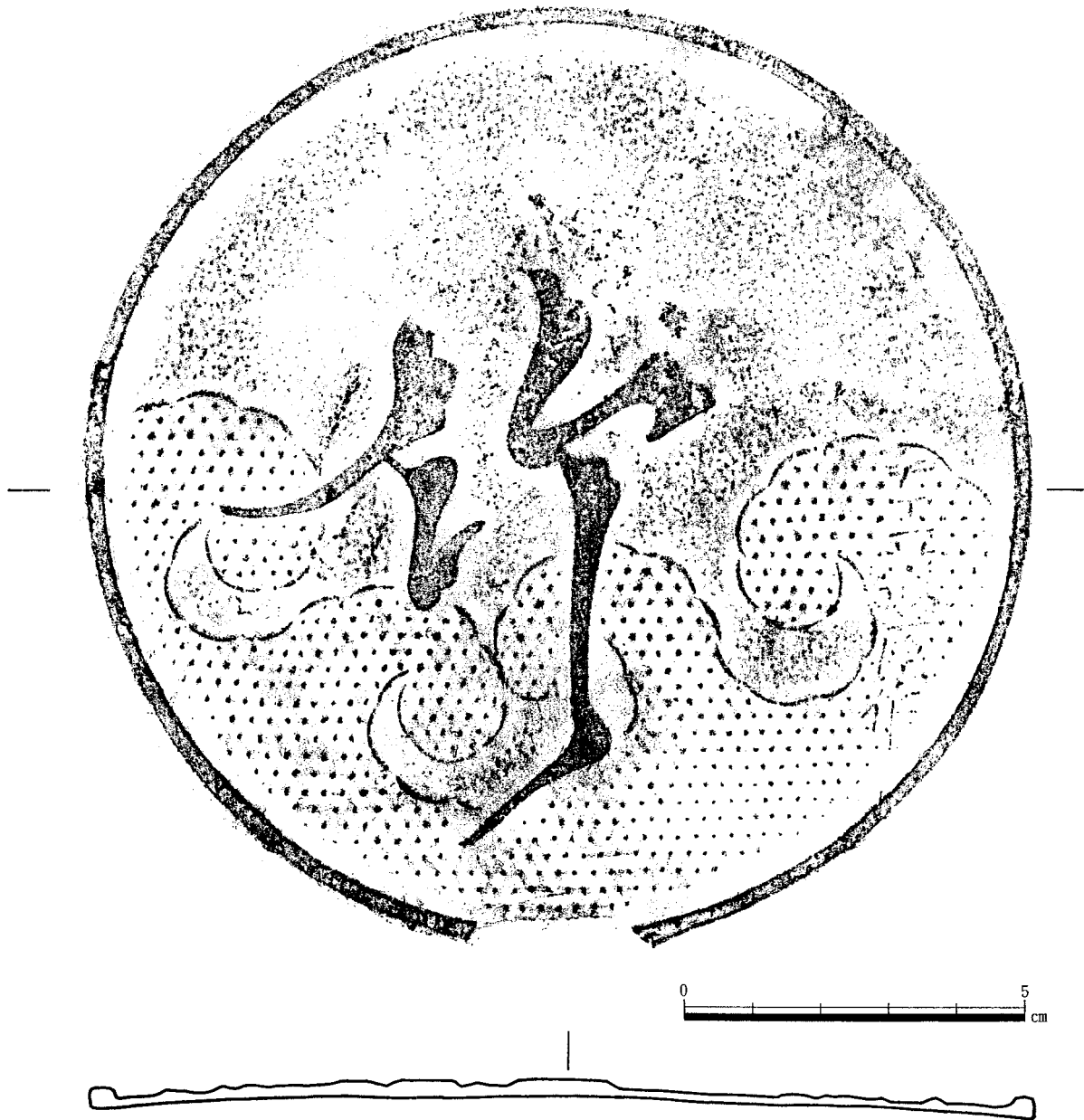


図32 纏向遺跡第101次調査出土遺物（1/1）

第7節 纏向遺跡第103次調査

1. はじめに

纏向遺跡第103次調査は大字巻野内字尾崎花485番で個人住宅の建設に伴う範囲確認調査として行った。纏向遺跡の北縁、天理市渋谷向山古墳から谷を挟んで南約250m地点にあたる。周辺では約30m北側で第80次調査が行われ、断面V字形の溝などを検出している。また、南約15mの第65次調査では巾着状布製品などが出土している。一帯は布留式期における纏向遺跡の中核的な地域である可能性が指摘されている。なおすでに概要が報告されているが¹⁾ 土層の状況や写真など未報告部分もあったため、改めて報告するものである。

調査は平成9年12月9日から翌1月16日にかけて行った。調査面積は48㎡である。

2. 調査の方法と層序 (図35)

3か所に調査区を設定しそれぞれW区、E区、N区としている (図34)。

概報によるとW区は南北12m、幅2mをはかり、基本層序は灰色土 (耕作土)、茶灰色土、茶褐色土、褐灰色土、褐灰色砂質土となる。南端で幅約0.4~0.7m、深さ0.3mの溝を検出したが無遺物である。

E区は南北9m、幅2mをはかり、基本層序は暗灰色土、暗灰色砂質土、暗黒色細砂、暗褐色灰色砂質土、灰色細砂となる。暗灰色土より少量の土師器・須恵器・瓦器が出土したのみで遺構は認められない。

N区は東西5m、幅1mをはかり、基本層序は灰色土 (耕作土)、褐灰色土、黄灰色砂質土、灰色砂

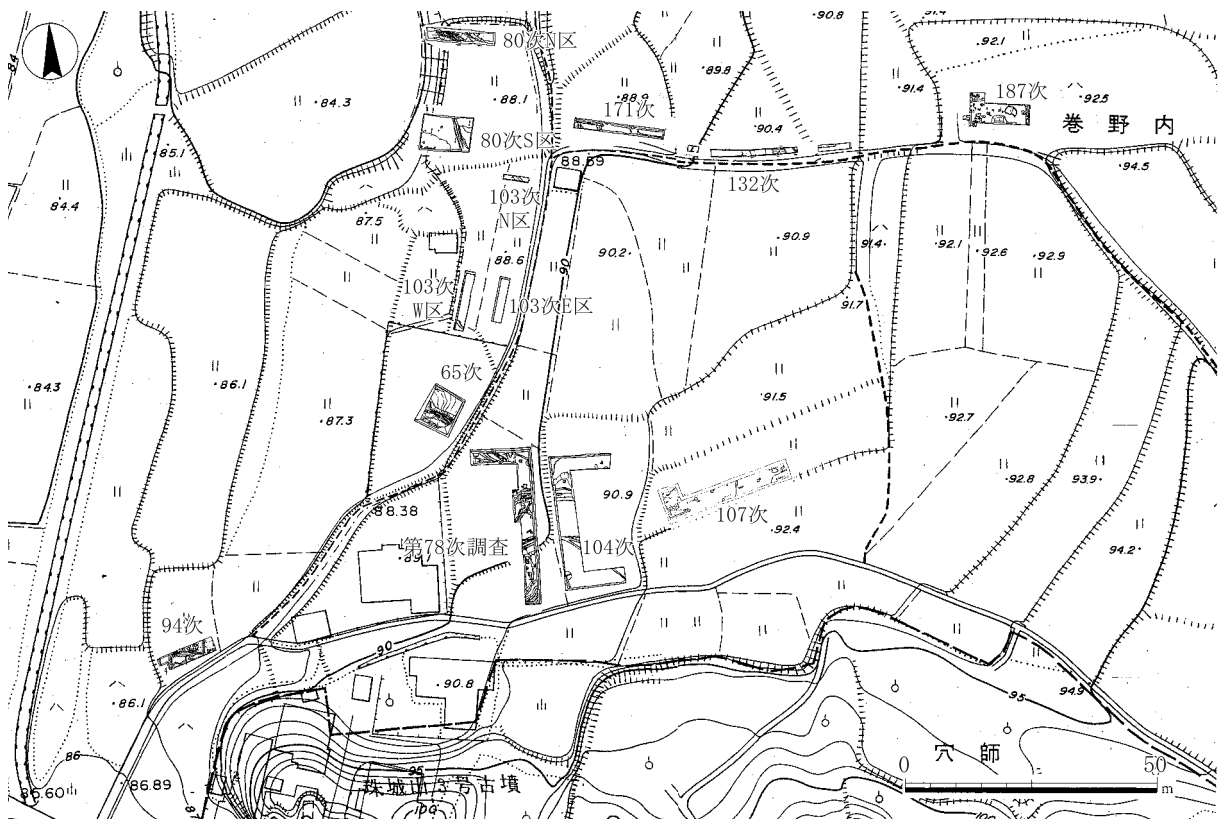
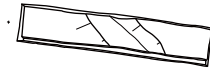


図33 纏向遺跡第103次調査地の位置 (1/1500)

質土となる。調査区西半で南西へ下る落ち込みを検出した。埋土は砂礫層と砂層の互層状の堆積である。時期不明の土師器細片が出土したほか、灰色土よりサヌカイト片が出土した。なおすべての調査区合計で580gの遺物が出土した。実測しうる遺物は出土していない。

3. まとめ

第103次調査ではほとんど遺物や遺構が検出できていないが、これまでに珠城山丘陵北麓では10度にわたる調査が行われており、重要な遺構が検出されている。今後も継続した調査が必要である。



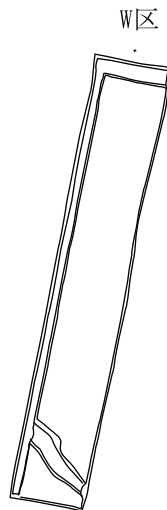
N区

X=-161100

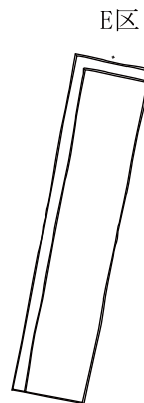
【注記】

- 1) 岩崎大介1998「纏向遺跡第103次調査報告」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集 平成9年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書』桜井市教育委員会

X=-161110



W区



E区

X=-161120

X=-161130



Y=-14000

Y=-13990

図34 調査区配置図 (1/200)

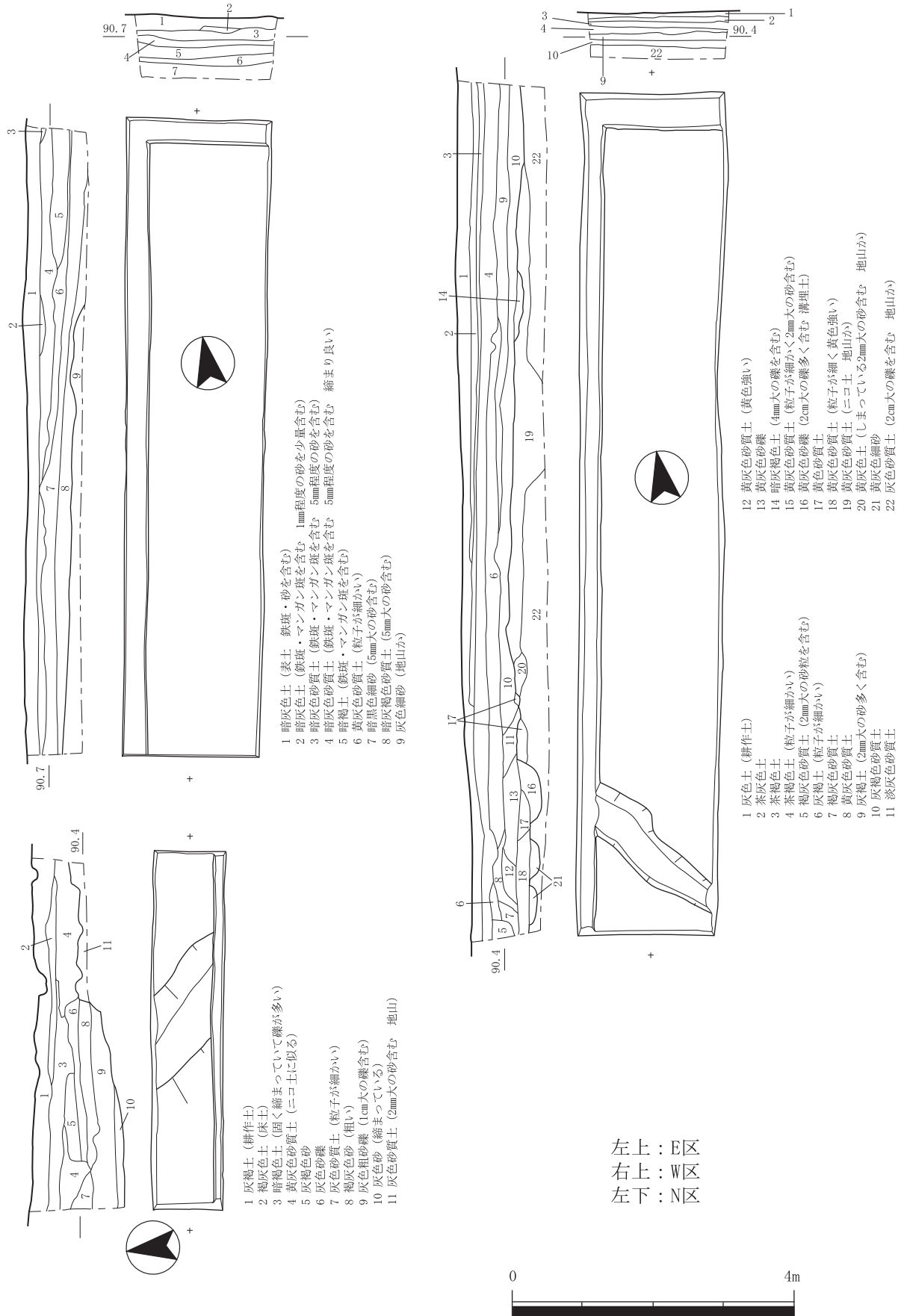


図35 纏向遺跡第103次調査平面・断面図 (1/80)

付載 纏向遺跡第78次調査溝 1 における花粉分析の概要

奈良教育大学 金原正明

文化財科学研究センター 金原正子

1. はじめに

花粉分析は、従来湖沼や湿原の堆積物を対象として広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生や環境の変遷を復原する手法として用いられてきた。考古遺跡では、埋没土や遺構内堆積物など堆積域や時間軸の限定された堆積物も対象となる。なお、土壌生成作用などで著しく分解された堆積土や堆積速度の速い堆積物では花粉などの有機遺体が残存しない場合もあり、これも環境の指標となる。ここではこれらのことも念頭において分析を行った。

2. 試料

試料は3点であり、10層、12層、66と付されたものである。いずれも泥質の細砂であった。(10層は図24の10層、12層は図24の12層、66は図21の29層に対応する：編者注)

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm 2分間の遠心分離を行った後上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300・1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類した。

4. 結果

(1) 結果と分類群

検出された分類群は樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉14、シダ植物孢子2形態の32であった。結果は表に示し、以下に出現した分類群を一覧する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリーシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、ウコギ科、ニワトコ属—ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、キンポウゲ科、カラマツソウ属、アブラナ科、セリ科、ナス科、シソ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

5. 考察

各試料には、草本花粉が多く含まれており、周囲はかなり開けていたと推定される。樹木花粉ではスギが多く、周辺にはスギが生育している。スギの分布するデータは奈良盆地では今までに得られていなく、特殊といえる。草本花粉ではイネ科・タンポポ亜科・ヨモギ属が多く、周囲には乾燥した開地が広がり、人為によって開発された集落などの状態であったことを示唆する。

【参考文献】

中村純（1973）花粉分析，古今書院。

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原，新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店。

日本第四紀学会編（1993）第四紀試料分析法，東京大学出版会。

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態，大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。中村純（1980）日本産花粉の標徴，大阪自然史博物館収蔵目録第13集。

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として 第四紀研究13。

中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学第10号

表7 纏向遺跡第78次調査花粉分析結果

分類群		溝1		
学名	和名	10層 (図24 の10層)	12層 (図24 の12層)	66 (図21の 29層)
Arboreal pollen	木本花粉			
<i>Abies</i>	モミ属	3		10
<i>Tsuga</i>	ツガ属	2		10
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	8	2	27
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	63	11	126
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	5		5
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>	イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科	4		1
<i>Juglans</i>	クルミ属			1
<i>Betula</i>	カバノキ属			2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属・アサダ			1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ・シイ属	3		7
<i>Quercus Subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1		7
<i>Quercus Subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3		7
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属・ケヤキ	1		3
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属・ムクノキ			1
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科		1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属・ガマズミ属	3		
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉			
<i>Moraceae-Urticaceae</i>	クワ科・イラクサ科	1		
<i>Leguminosae</i>	マメ科			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
<i>Gramineae</i>	イネ科	68	9	76
<i>Oryza type</i>	イネ属型	2		
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	3		7
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アカザ科・ヒユ科	3		4
<i>Ranunculaceae</i>	キンボウゲ科	2		
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属			1
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科	1		
<i>Umbelliferae</i>	セリ科		1	5
<i>Solanaceae</i>	ナス科			1
<i>Labiatae</i>	シソ科	2		1
<i>Lactuicoideae</i>	タンポポ亜科	58		79
<i>Asteroideae</i>	キク亜科	7		6
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	6		
<i>Astemisia</i>	ヨモギ属	50	5	2
Fern spore	シダ植物孢子			
<i>Monolate type spore</i>	単条溝孢子	6	6	13
<i>Trilate type spore</i>	三条溝孢子	41	12	113
<i>Arboreal pollen</i>	樹木花粉	96	14	208
<i>Arboreal・Nonarboreal pollen</i>	木本・草本花粉	1	0	1
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉	202	15	182
Total pollen	花粉総数	299	29	391
<i>Unknown Pollen</i>	未同定花粉	0	1	1
Fern spore	シダ植物孢子	47	18	126

写真図版



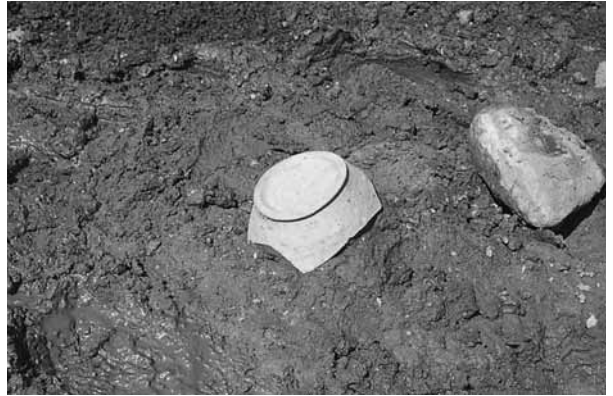
調査風景（西から）



調査区掘削状況（東から）



木製品検出状況



遺物検出状況



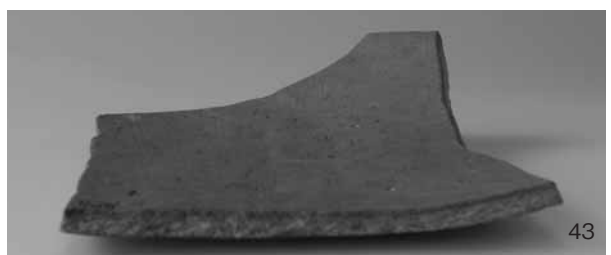
調査区完掘状況（東から）



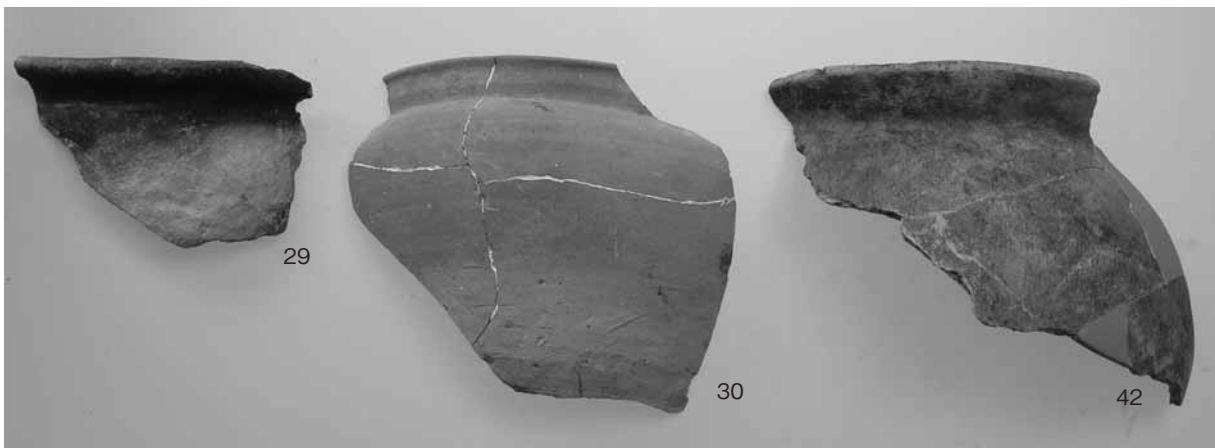
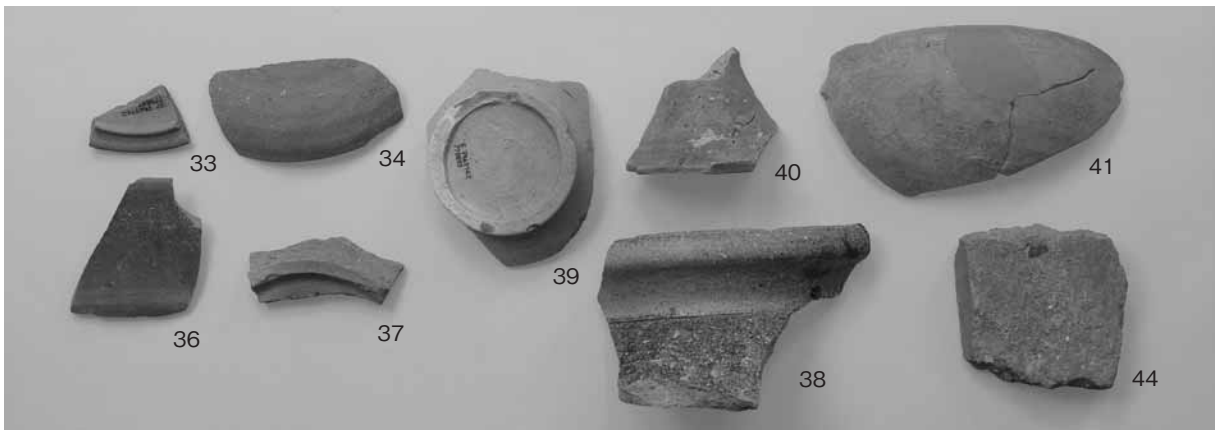
北壁土層堆積



旧河道深堀部分



図版3 纏向遺跡第14次調査3





調査区全景（北から）



溝Aコーナー部分遺物出土状況（北から）



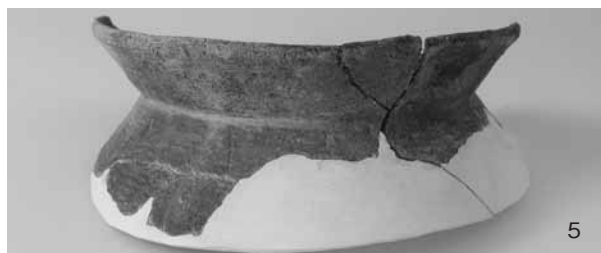
溝A遺物出土状況（南から）



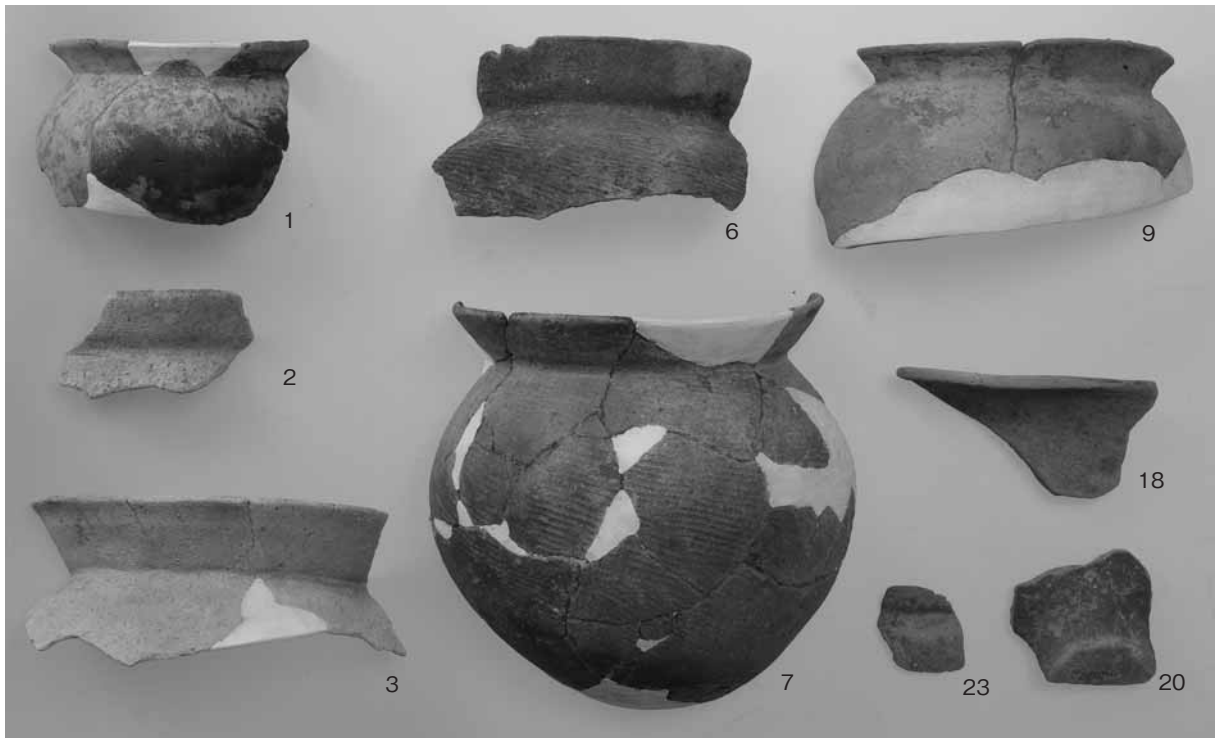
東壁溝A・溝B断面



東壁溝A断面



図版6 纏向遺跡第44次調査3





調査区全景（東から）



北壁土層断面（南から）



上層掘削状況（南から）



上層掘削状況（東から）



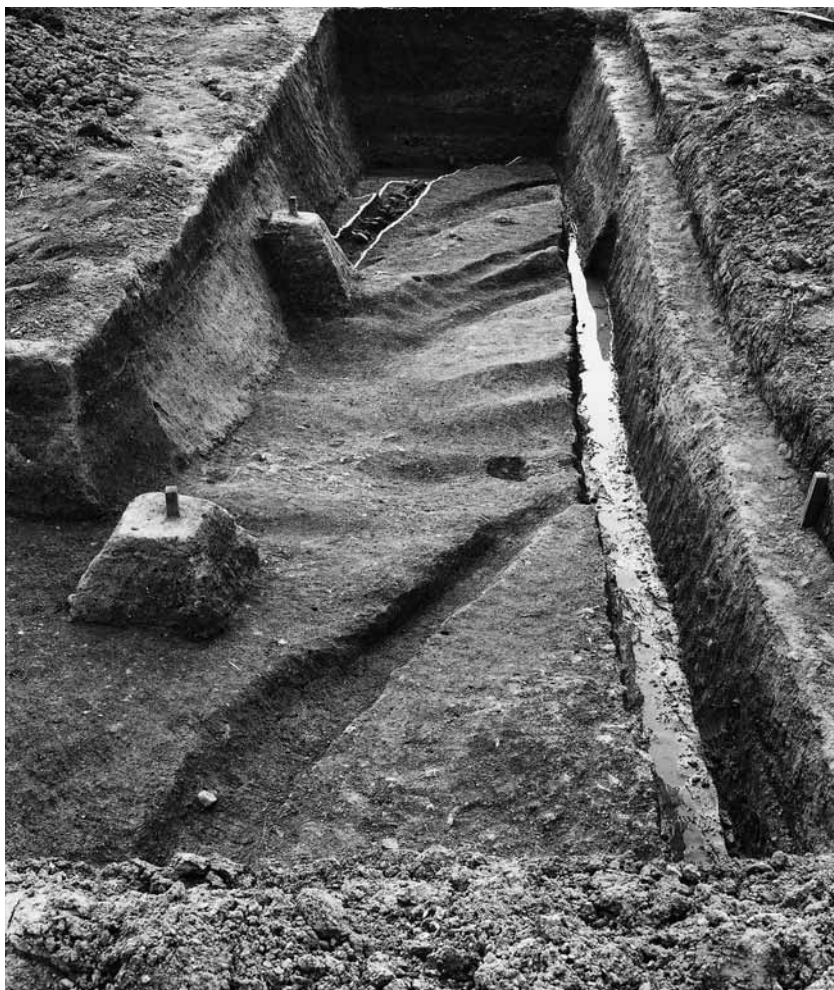
埋め戻し後の状況（南東から）



調査区全景（北から）



溝1完掘状況（東から）



調査区全景（東から）



溝1 アゼ断面（東から）



溝2 遺物検出状況（西から）



第78次調査出土遺物



上層掘削状況（北から）



下層完掘状況（南から）



S D01完掘状況（西から）



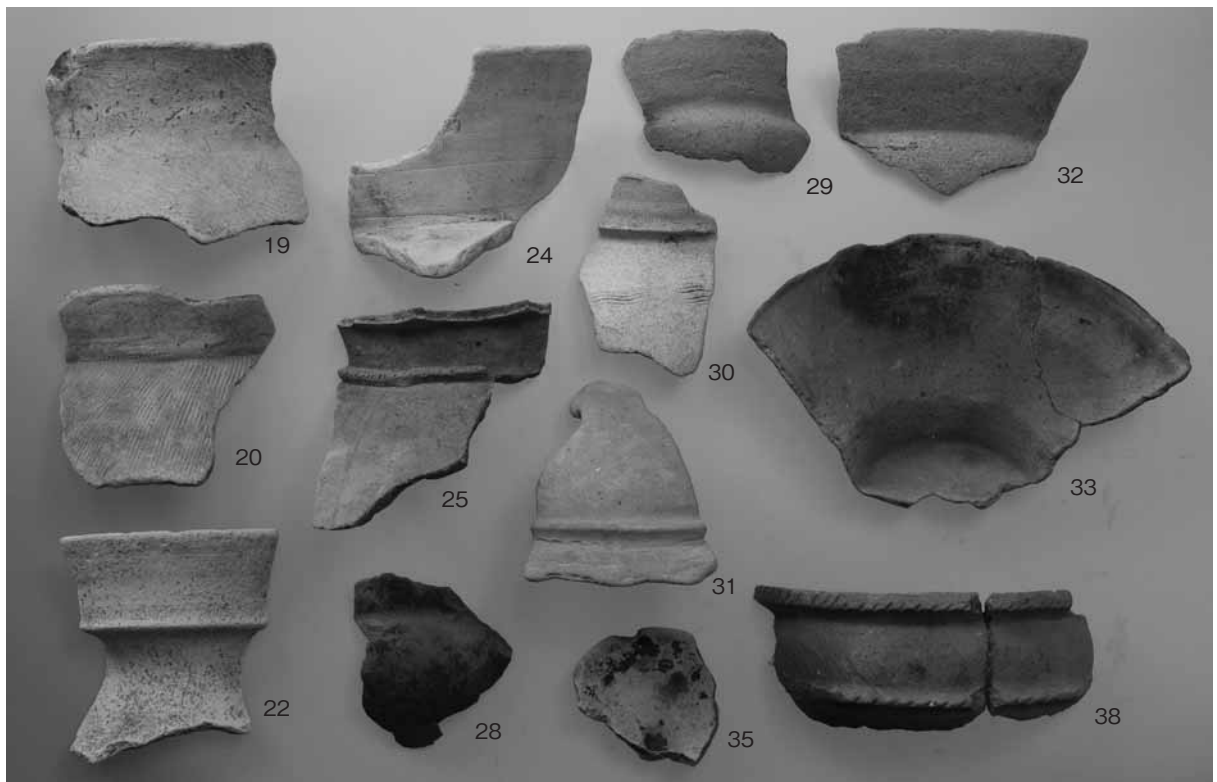
東壁旧河道掘削状況（西から）



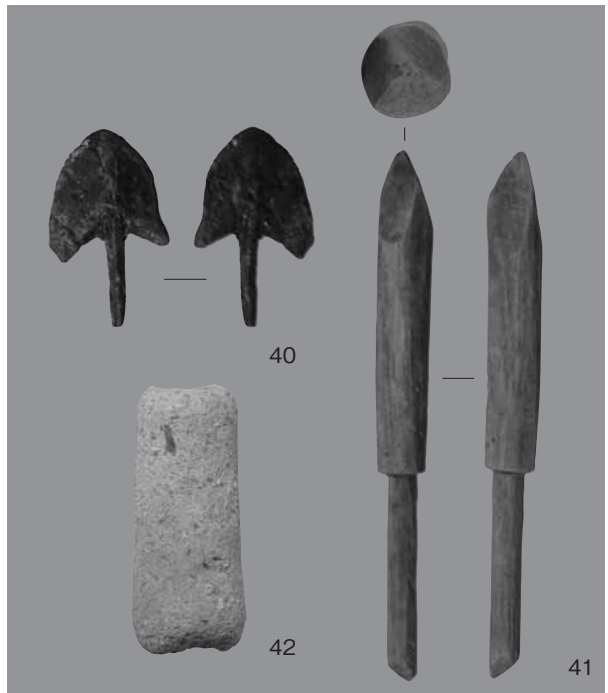
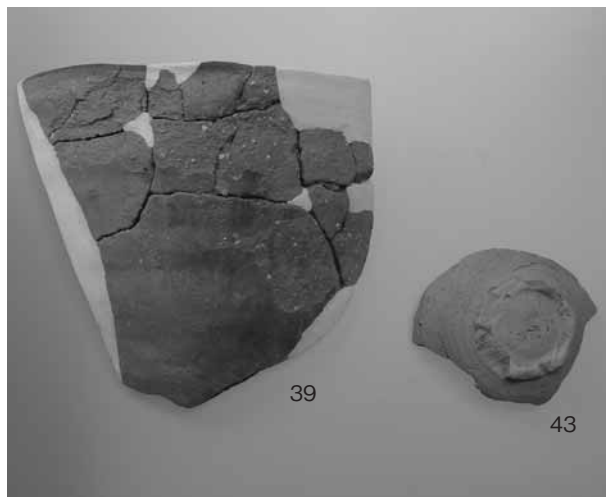
S D03完掘状況（東から）



東壁南端旧河道掘削状況（西から）



出土遺物1





暗渠全景（西から）



調査区完掘状況（西から）



北側断面（東南から）



調査区埋め戻し状況（西から）



東側断面（西から）



出土した柄鏡



W区全景 (南から)



E区全景 (南から)



N区全景 (西から)



W区西壁土層断面



W区溝 (西から)



W区西壁土層断面溝部分

報告書抄録

ふりがな	まきむくいせきはくつちょうさほうこくしょよん
書名	纏向遺跡発掘調査報告書4
副書名	第14次・44次・58次・78次・99次・101次・103次調査
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	森暢郎（編集） 金原正明 金原正子
編集機関	桜井市纏向学研究センター
所在地	〒633-0085 奈良県桜井市東田339番地 TEL/FAX 0744-45-0590
発行機関	桜井市教育委員会
発行年月日	平成30（2018）年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
纏向遺跡 第14次	桜井市 巻野内字殿西376-2、376-3	292061	11-D-487	34度32 分47秒	135度50 分38秒	1977.7.15 ～8.6	60㎡	住宅建設
纏向遺跡 第44次	桜井市 東田字ヤナイタ178			34度32 分40秒	135度50 分5秒	1985.6.15 ～7.27	100㎡	個人住宅
纏向遺跡 第58次	桜井市 箸中字河原531-1他			34度32 分25秒	135度50 分50秒	1989.10.23 ～11.16	54㎡	
纏向遺跡 第78次	巻野内字玉井466、 467			34度32 分49秒	135度50 分51秒	1994.3.7 ～3.31	130㎡	
纏向遺跡 第99次	桜井市 大豆越字灯籠田107-1			34度33 分2秒	135度50 分10秒	1997.8.5 ～8.22	75㎡	
纏向遺跡 第101次	桜井市 穴師322			34度32 分41秒	135度51 分01秒	1997.11.25 ～12.5	12㎡	
纏向遺跡 第103次	桜井市 巻野内字尾崎花485			34度32 分41秒	135度51 分01秒	1997.12.9 ～1.16	48㎡	

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
纏向遺跡第14次	集落	旧河道	土師器・須恵器・ 緑釉陶器・瓦・土馬	古代の遺物中心 軒丸瓦6225A
纏向遺跡第44次		方形周溝墓	土師器	庄内3式期の方形周溝墓
纏向遺跡第58次		旧河道		
纏向遺跡第78次		区画溝	土師器・須恵器	104次調査検出の溝に接続する
纏向遺跡第99次		旧河道	土師器・銅鏃・木鏃	外来系土器が多数出土
纏向遺跡第101次		旧河道	土器・柄鏡	
纏向遺跡第103次		溝	土器	

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第47集

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書 4

—— 第14次・44次・58次・78次・99次・101次・103次調査 ——

編 集 桜井市纏向学研究センター

〒633-0085 奈良県桜井市東田339番地

TEL/FAX 0744-45-0590

発 行 桜 井 市 教 育 委 員 会

年月日 平成30（2018）年3月30日

印 刷 株 式 会 社 明 新 社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464